

実践報告

E3 新科目「アクティブリスニング」 始動期実践からの省察

—自由な学び合いと多様な競い合いを活かした実践にむけて—

柳瀬 陽介*

要 旨

この実践報告は、新 E3 科目「アクティブリスニング」の 2023 年度前期の担当者が、自らの実践を報告して考察し、同科目の今後について実践的な提案をするものである。「アクティブリスニング」のシラバスは同科目を、英語の音声の特徴を分析的に理解することによりリスニング能力を向上させるボトムアップ型の指導と、文脈・背景知識・発話状況などからの予測によりリスニングに対応するトップダウン型の指導を組み合わせる授業である、と定めている。筆者は、ボトムアップ型の指導を、「細かな技能習得から大局的な技能習得へ」「指導者の経験知の挿入」「リスニング直後の発音指導」「振り返りの共有」「AI とウェブによるリソースの整備」といった方針で行った。トップダウン型の指導では、「教師推薦サイト」と「受講生推薦サイト」の共有を行ったが、「英語変種の偏り」と「テスト形式リスニング」については改善の必要性を認めた。今後、2 種類の指導を両立させるだけでなく有機的に統合し、受講生が必要とするリスニング力をさらに上げるためには、自由な学び合いと多様な競い合いを基盤としたリスニング活動をさらに充実するべきであると本稿は提案する。

【キーワード】ボトムアップ、トップダウン、協働、競い合い

1 はじめに

現在の AI (Artificial Intelligence) の急速な進展によって、人間教師や学校教室の必要性に対して再び疑問符がつけられようとしている。だが MOOCs (Massive Open Online Courses : 大規模公開オンライン講座) が米国の高等教育に登場し始めた 2010 年代前半の期待とそれから 10 数年たった現在の現実のギャップを考えると、そう簡単にテクノロジーが学びにおける人間の必要性を根絶するとも思い難い。当初は、MOOCs が教育内容を正確かつ迅速に伝達する以上、物理的な教室に教師と学習者が集う必要はなくなるのではないかと論さえ聞こえてきた。だが現在では、多くの MOOCs では 90% 以上の受講者がコースを完了することなく脱落していることが知られている (Chi, Zhang & Shi, 2023)。

本学でも英語リスニング指導については、GORILLA というオンラインシステムが、「英語ライティングーリスニング A/B」の必修科目の授業外課題用に稼働している。GORILLA は学生に毎週

* 京都大学国際高等教育院

教材を自動配信し学生の解答を機械採点している。その不合格率については公開されていないのでここに掲載することはできないが、通常クラスの1回生でも看過できない程の学生がGORILLAで不合格となり、この必修科目がシラバスの規定で自動的に不合格になっている。再履修クラスでの不合格率は、一回生クラスの不合格率の数倍であり、今後は留年生の増加が見込まれている。「課題を配信し合格基準を明言しているにもかかわらず課題をやらないのは、学生の問題であって、大学の問題ではない」といった説明は、学びの実情に即していないのかもしれない。上のMOOCsの事例と併せて考えてみても、特別な学習意欲を備えていない大多数の学習者にとっては、機械を通じて伝達される一般的解説や万人向けの励ましのことばだけでは学習を十分に継続し難いとも考えられる。教室という物理的空間に、複数の学習者と教師が集うことの重要性は、コロナが蔓延して授業をオンラインに切り替えなくてはならなくなった時期に、多くの教師と学習者によって実感された。本稿は、教師と学習者が教室に集い、共通の課題に対して自由な学び合い¹と多様な競い合い²をもって挑戦することの教育的意義について、本学のE3科目での新科目「アクティブリスニング」の初期実践の報告と省察を通じて検討する。

E3科目とは、本学の共通・教養科目の中での英語に関する選択科目群を意味する³。E1科目が英語リーディングを教える科目、E2科目が英語を教室言語として一般教養を教えるEMI (English as a Medium of Instruction) の科目であるのに対して、E3科目は英語技能の向上を目的とする。そのE3科目の改善については、E3検討WG (Working Group)⁴が、2021年3月23日に最終答申を国際高等教育院に提出した (E3科目検討WG, 2021)。答申では、1回生を対象としたTOFEL ITPのリスニングスコアを見る限り、英語での授業を受けられる留学レベルに到達している学生がまだ少なく、オンラインのGORILLAのみでは不十分であることが述べられている⁵。また本学のE2科目についても受講者がまだ十分とは言えず、受講者のリスニング (およびスピーキング) の能力について改善の余地があるとしている。ゆえに、京大内外のEMIの授業に対応できるようにリスニング力を向上させることが英語カリキュラムの課題であるとされ、E3科目改革が提案された。その改革の全容を述べることは紙幅の関係で避けるが、本稿で扱う「アクティブリスニング」はその改革の一部として新設された科目である⁶。

「アクティブリスニング」はE2科目の履修に貢献することを目指しているもので、2回生からの履修しか認めない他のE3科目と異なり、1回生後期からの履修が認められた。さらに、答申はE3科目について以下のようにまとめ、「アクティブリスニング」の新設は、今後の「担当教員等の資源を再配置する大改革」の一部であることを明らかにしている。

すでにホームページ等で広報しているように、1回生では英語基本技能を必修4科目で養成し、2回生では英語力強化に資する科目としてE1、E2、E3科目を配置している。この基本方針は揺らぐものではないが、現状が最適化されているわけではない。1回生でReadingとWritingのみを授業内で教員が教え、Listeningをオンライン自習に頼っている点は再検討を要する。2回生からのE2科目履修での学習効果を期待するのであれば、それに備えてListening力を早期に養成しなければならない。このような観点から、外国語科目群 (英語) に与えられた必修4科目8単位の資源をどのように適切に割り振るかが重要な課題である。初等中等教育における英語教育の拡充により新入生の英語能力は次第に向上するものと推測される。またAI等の進歩により語学の教授法も進化するであろう。このような教育環境の変化に適応して最適の教育効果が得られるように、1回生の各セメスターで対象とする英語基本技能や、その学習時間、

単位数（科目数）、担当教員等の資源を再配置する大改革が望まれる。（E3 科目検討 WG, 2021, p. 7）

この答申を受け、「アクティブリスニング」の新設が大学により正式に認められた。国際高等教育院・附属国際学術言語教育センター（i-ARRC）の英語教育部門教員の一部のメンバーからなる検討グループは、この科目のシラバスの共通部分の案を作成した。英語部会はその案を審議し承認した。シラバスに「共通部分」を設けたのは、「アクティブリスニング」が複数クラス開講されるからである。担当教員はシラバスの共通部分の記述にしたがって科目を基本設計する一方、残りは各人の創意工夫で授業を企画運営することが、教育効果を高める上でもっとも現実的と考えられた。その共通部分は以下のとおりである。

■授業の概要・目的

本科目は、英語による講義を履修するために必要となるリスニング能力の育成を目的とする。リスニング能力の育成では、語・文レベルでの聴解力を重視するボトムアップ型と、背景知識や文脈などを活用した意味理解を重視するトップダウン型の両方を組み合わせる。リスニング能力の向上により、主体的に英語での講義に参加できることを目指す。

■到達目標

本科目は、以下の3つを到達目標として定める。この科目が修了する時点で受講生が以下の能力を身につけることを目標とする。

- (1) 英語の音声的特徴（母音、子音、リズム、イントネーション、連結、脱落、同化など）を分析的に理解し、その知識をリスニングの際に利用することができる。
- (2) 文脈や背景知識、発話の状況を活用して、次にくる情報や内容などを予測したり、自身の理解を修正したりする方法を身につけ、その方法をリスニングの際に利用することができる。
- (3) 英語の概論的講義（10–20分程度）を聞いて、その概要や要点を的確に把握することができる。

■成績評価の方法・観点

各講師が定め、キャリア形成特別部会（国際コミュニケーション）の専門委員が検証する。ただしどの授業も、成績評価のうち30%は期末テストによって行う。期末テストでは、10分程度の英語講義を用意し、講義の概要と要点が捉えられているかという観点から評価を行う。期末試験以外の成績評価の方法・観点については、各講師の判断に委ね、シラバスに執筆する。キャリア形成特別部会（国際コミュニケーション）の専門委員が検証して、方法・観点の妥当性を確認する。

以上の共通部分をまとめるなら、「アクティブリスニング」は「英語の音声的特徴を分析的に理解することによりリスニング能力を向上させるボトムアップ型の指導と、文脈・背景知識・発話状況などからの予測によりリスニングに対応するトップダウン型の指導を組み合わせる授業」となる。別の言い方をすると、「アクティブリスニング」は、調音音声学的な知識をリスニングに応用することを教えるが調音音声学の授業ではない。同時に、受講者にリスニング課題を多く課すが「聞いているうちにリスニング能力は自然と向上する」と分析的指導を放棄するような授業でもない。

「アクティブリスニング」の開始については、2022年度後期と2023年度の前期・後期を試行実

施期間⁷としてそれぞれの Semester で1クラスだけ開設した。試行実施の知見を共有した上で2024年度から複数クラス(5クラス)で「アクティブリスニング」は本格的に開催されることになった。2023年度前期が終わった時点で執筆されている本稿は、試行実施からの知見や洞察を英語教員が共有するために書かれている⁸。加えて本稿は、英語教育に関する政策決定者によって読まれ、英語教育関係者の間で英語教育実践についての理解が深められることも目指している。

以下の章では、筆者の2023年度前期の「アクティブリスニング」授業実践について報告し考察を加える。予めその概要を述べるなら、受講者の毎週のレポートや授業中の表情などから判断する限り、筆者はボトムアップ型指導とトップダウン型指導の両方においてそれなりの満足を受講者に与えたと思われる⁹。だが期末試験の答案用紙(初出の短い英語講義のノートテイキングと英語での要約)を見る限り、受講生が自分の直接的な興味が特にない内容のリスニングをした際のノートテイキングと要約は、日頃のボトムアップ型とトップダウン型の課題から推測できる質の高さを有していなかったように思えた。言ってみるなら、筆者はボトムアップ型指導とトップダウン型指導の「組み合わせ」はしたものの、両者を十分に「統合」できていなかったのかもしれないことが反省として浮かび上がった。

この反省の過程で、筆者は、「ボトムアップ型指導とトップダウン型指導を統合してリスニング能力をさらに向上させるためには、受講生集団がある共通のリスニング課題に挑戦し、受講生が自由な学び合いと多様な競い合いを経験することが重要ではないか」という実践的仮説を立てるにいたった。以下では、筆者の「アクティブリスニング」実践を具体的に報告し、なぜ上の実践的仮説にたどり着いたかを説明する。

なお今回の実践は、筆者にとって初めて教える科目であったがゆえ、授業は探索的なものとなった。筆者は、授業の基本方針を定めた後は、試行錯誤で学習者の学びを充実させる方法を探るしかなかった¹⁰。この実践では、予め定められた指標を Semester 開始時と終了時に測定し授業の効果を実証するようなことはしていない。よって本稿の記述は質的なものにならざるを得ない。

質的記述が恣意的で一面的なものになることを避けるため、以下、筆者は自らの中で矛盾したり錯綜したりした思いなども記述することとする。ゆえに本稿は、文化心理学の泰斗ブルーナーが言うところの「物語様式」(narrative mode)で語ることも含む(Bruner, 1986, 柳瀬, 2018)。章や節の構成は読みやすさを配慮して「科学規範様式」(paradigmatic mode)にしたがうが、その内容の表現においては物語形式を使って一義的な結論が定まらないことも書く。また、直接話法での口語表現も再現して教室の雰囲気伝える。筆者としては、科学規範様式では描きたい筆者の情動や価値葛藤を物語様式で示すことで、本稿が実践者の思考過程を示す事例研究となることを願っている。

2 ボトムアップ型指導の実践とその反省

筆者のボトムアップ型指導の特徴は、「細かな技能習得から大局的な技能習得へ」「指導者の経験知の挿入」「リスニング直後の発音指導」「振り返りの共有」「AIとウェブによるリソースの整備」の5つにまとめられる。以下、それぞれについて短く説明する。

2.1 細かな技能習得から大局的な技能習得へ

筆者は授業の教科書として、『英語の発音パーフェクト学習事典』(深澤, 2015)を採択した。

この本は、多くの例文（音源付き）と共に、英語の音声的特徴を日本語の一般書の中ではおそらくもっとも体系的・網羅的に説明している書の一つである。英語の発音の指導書としてのこの本の章構成は、表1の左側のようにになっている。リズムやイントネーションといった大局的な技能から始まり、子音連続といった細かな技能に至り、最後に個々の母音・子音を教えている。

この大局から細部へという順番は、たとえば幼児に歌を教える時にしばしば見られる。歌を教える大人は、まずは手拍子（リズム）を強調しながらメロディー（イントネーション）を示し、幼児がおおまかに歌えることを目指す。幼児に歌わせるためには、最初から音楽用語を導入したり、スタッカートやレガートといった細部の指導をしたりはしない。歌詞の正確な発音も最初は求めない。

だが筆者は本書をあくまでも大学生のリスニングの指導のために使った。特にボトムアップ型の指導ということで、筆者は、受講生がこれまでわからなかった細部の音が認識でき学習の効果を実感することを望んだ。そのため筆者の指導の順序は、(1) 発音記号、(2) 音素の変化が顕著な同化 (assimilation)、(3) 音素が消失する脱落 (reduction)、(4) 音素と音素が連続する連結 (linking)、(5) リズム・イントネーション、にした。『英語の発音パーフェクト学習事典』では最後に掲載されている母音と子音の仕組み・聞き取り・発音を最初に教え、それ以降の学習が感覚的ではなく調音音声学的知識に裏づけられた学習になるようにしたわけである。同化・脱落・連結の聞き取りの指導の際にも、その認識が困難である理由を筆者は音声学的に説明した。加えて、受講生自身に口頭再生させることによって学習内容を身体化させた。その結果、学習者がリズム・イントネーションを学ぶ時点では、その構成要素である音素がそれなりに発音できるようにした。筆者のセメスターでの提示順は表1の右側に示してある。

だが、この表1の右側の、(1) 母音・子音→(2) 同化→(3) 脱落→(4) 連結→(5) リズム・イントネーションの順番は2023年度前期の反省をもって作成したものであり、2023年度前期に実際に行った順番ではない。前期の実践では、(2) 同化→(3) 脱落→(4) 連結の「顕著な音素の変化がある現象→音素が消失する現象→音素と音素が連続する現象」という順番を確立できておらず、母音・子音を導入した後に、いきなり教科書の第3章にあった連結を指導した。つまり、『英語の発音パーフェクト学習事典』の最後の部分（母音・子音）と最初の部分（リズム・イントネーション）を取り替えた以外は、その本の章の順番にしたがったわけである。だが連結の聞き取りは、視覚（リーディング）優位で英語力を培ってきた受講生にとっては非常に困難なものであった。受

表1 音声的特徴の『英語の発音パーフェクト学習事典』と筆者の授業での提示順

	『英語の発音パーフェクト学習事典』	筆者の授業での提示順
1	リズム（第1章）	母音（第9章）
2	イントネーション（第2章）	子音（第9章）
3	連結（第3章）	同化（第4章）
4	同化（第4章）	脱落・子音連続（第7章・第8章）
5	短縮形（第5章）	短縮形・破裂（第5章・第6章）
6	破裂（第6章）	連結（第3章）その1
7	脱落（第7章）	連結（第3章）その2
8	子音連続（第8章）	リズム（第1章）
9	母音・子音（第9章）	イントネーション（第2章）その1
10		イントネーション（第2章）その2 ¹¹

講生にとって、紙面では明白な単語間の空白部分が消えた一連の音素を、耳で分析的に同定することは難しかった。連結された音の口頭再生も複数の音素を含むものであるから、多くの受講生にとっては容易なものではなかった。よって連結の授業は当初の予定に反して2週に延ばさざるをえなかった。他方、その連結の学習が終われば、音の変化が明らかな同化の聞き取りと口頭再生は容易すぎるほどだった¹²。それに続いた脱落の聞き取り（および口頭再生）もさほど困難ではなかった。

つまり2023年度前期のボトムアップ型の指導は、受講生にリスニングでの「難から易」の順序で教材を提示してしまったことになる。受講生にとっての教材の難易度を、授業中の反応から学んだ筆者としては、セメスター修了後に「もっとも音素変化が顕著な現象から微妙な現象」の(2)→(3)→(4)の順番が受講生にとっての「易から難」の順であることを理解した。母音・子音の個別音素を教えた後に、同化と脱落をこの順番で教えれば、授業が受講生にとって難課題の連結に到達する頃には、受講生もそれほど連結を難しいとは思わないだろう。受講生の中には、難しい課題に直面すると直ちに苦手意識を大きくしてしまう者もいるので、課題の難易度の設定加減はきわめて重要である。今後はこの順番を基本としながら、さらに観察と省察を重ねて、必要に応じて順番の再調整を行いたい。

2.2 指導者の経験知の挿入

『英語の発音パーフェクト学習事典』は、音源付きの例文が豊富にあるので、筆者は次々に音源を受講生にディクテーション（書き取り）や口頭再生をさせることができた。説明は教科書やスライドで簡潔に行い、できるだけ多くの時間を聞き取りと発音の練習に費やした。

だがこのように大量の練習を行う際に注意すべきは、練習が単調になり学習者の集中度が低下してしまうことである。この現象を避けるため、筆者は適宜、自らの英語学習や使用で学んだことを練習の合間に早口で告げた。例えば、「次の例文、教科書に文字が書いてある“Can I”についても注意。どのように発音されてる？」「次の文は、日常会話でもこのままの形で使われるから、イントネーションごと丸ごと覚えてね」「次の /z/ の音は聞き取りにくいんだよね。日本語では「阪神タイガース」と言っても「タイガーズ」とは言わんよね。それぐらい語尾の /z/ の音は、日本人にとって聞き取りにくい」などと述べた。筆者がこれまでの経験で学んだ具体的エピソードを挟むことにより、大量かつ高速の練習が機械的になることをある程度防げたのではないかと筆者は思っている。

2.3 リスニング直後の発音指導

ある運動の知覚能力は、その運動を自ら実行することにより向上するという一般原則にしたがい、筆者は英語の音声特徴を受講生に聞かせるだけにはせず、ほぼ毎回、受講生に発音させた。しかし日本では英語の発音がしばしば象徴的な行為となり、発音をする者の知性や教養などを示すと誤解されている。これは黒船や進駐軍以来の米国に対するコンプレックス（錯綜した感情群）によるものかもしれない。日本人学習者の英語発音が米国人の発音とかけ離れていると学習者はしばしばそれを恥と考える。逆に米国人の発音に似た発音ができる日本人学習者の中には、他の日本人学習者のコンプレックスを刺激することを避けるためわざと発音を日本風に変えたりする者もいる。あるいは日本人英語教師の中には、日本人の英語の発音がいかに「ネイティブ」—それが何を意味するものであれ—の発音と異なるかを指摘するのに執心する者もいる（世界の英語変種については後にまた取り上げる）。このような状況で、筆者としては発音練習が学習者に妙にコンプレックスをこじらせないように配慮した。

具体的には、筆者は受講生個人がクラス全体の注目の中で発音する練習は避けた。受講生が発音再生をする際は個々に行くか、ペア¹³の相手に行くだけにとどめた。授業中も筆者はしばしば次のように語り、受講生が妙なコンプレックスに巻き込まれないようにした。

「僕たち外国人が英語を完璧に母語話者のようにしゃべることは、まあまず無理っしょ。ぶっちゃけ、関西出身でない僕がいくら関西弁をしゃべっても、生粋の関西人はすぐにわかるし。同じ日本語の中でもそうなんやから、外国語の発音の違いは、まあ、まず残ると考えるべきですよ。だから外国語として英語を使うんなら、とりあえずフツーに理解してもらえる発音があれば十分です。大切なのは話す内容。とはいえ今は、とりあえずの練習モデルとしてこの音源のように発音することを目指してください。」

また筆者が苦手とする一部の発音をする際にも「実は僕はこの発音はあまり得意じゃないんだよなあ…うまく言えるかなあ？聞いてみて」などと自分の発音とモデルの発音の比較をさせたりもした。その反面で、授業の随所で英語を使い、筆者はそれなりの英語の使い手であることを示した。このあたりの生涯英語学習者としての謙虚さと英語使用者としての誇示のバランスは微妙である。筆者は、受講生に「この人は英語の指導者としてふさわしい英語技能はもっているが、自分の実力を冷静に認識しそれを正直に語れる人だ」と判断してもらえるように心がけている¹⁴。ともあれ多くの受講生と教師がこのような錯綜した感情群に取り憑かれている場合、英語の発音練習というのは扱いづらくなりがちである。

だが、 Semester 最後で受講生にオーラルプレゼンテーションを披露させた時¹⁵、受講生はそれぞれの「ネイティブらしさ」あるいは「日本人英語らしさ」で発表をした。教科書で扱った米国英語の音声的特徴を完璧に身体化した受講生はもちろんいなかったが、すべての受講生は、メッセージの意義を伝えるリズムとイントネーションにおいて的確であった。すべての受講生は「前に立ったらマジで胸バクバクでした」などと述べたが、受講生のパフォーマンスはパブリックスピーキングとして見事であった。ここから考えると、筆者はコンプレックスに翻弄されているのかもしれない（それには、単なる職業人として英語を使うのではなく、英語の「専門家」として英語を使うプレッシャーに晒され続けてきた自分の経歴が絡んでいるのだろう）。筆者も、授業中に当たり前で受講生個人に発音練習を披露させるべきなのかもしれない。そういった経験の積み重ねが、概念としては長年語られ続けてもなかなか人々がその実感できない「日本人英語」というジャンルの自然な定着につながるのかもしれない。「日本人英語」はしばしば揶揄の対象にはなっても、国内の第2言語としての「インド英語」や「シンガポール英語」のような英語変種の一つとしてはあまり認められていない。今後は、発音練習のやり方について、多くの知見を得ながら試行錯誤してゆきたい。

2.4 振り返りの共有

英語の音声的特徴の聞き取りが困難であった場合、筆者は必ずペアで互いの理解の状況を確認させその原因を分析させた。分析の際、受講生は直前に習ったスライドや教科書の該当箇所を参照した。知識伝授の直後に、常に知識の生きた応用をさせたわけである。聞き取りの難しさをペアで確認しあうことにより、受講生はリスニングを苦手としていることが自分だけでないことを知り安心する。同時に、ペアの相手から自分とは異なる洞察を得る。さらに互いの姿勢から鼓舞されること

もしばしばである。学び合いと競い合いは教室の学びの大きな意義であると思われる。

受講生がリラックスした雰囲気の中で、しかし真剣に学び合いに取り組んでいたことは、机間巡視する筆者によって毎回観察された。筆者は教室の中を歩きながら、個々のペアの発言内容やそのトーンを観察し、適切なタイミングで学び合いを止めさせ、クラス全体での知見の共有という次の段階に移った。ただ筆者の観察能力には限界があるので、よほど時間が押している時を除いて筆者は「もうちょっと話し合いたい人、手を挙げてくれる～」などと尋ね、一人でも挙手したら「はい、それじゃあもう少しね」と学び合いの時間を延長した。挙手を求め、それを無視しないことで筆者は学習者の自発性を最大限に尊重した¹⁶。

なお、筆者がキッチンタイマーなどで学生の活動の時間を正確に区切らないのは、教室の雰囲気を大切にしたいからである。臨床精神科医として卓越した技量をもつ神田橋（1990, 1994）は、さまざまな精神療法を比較した上で、もっとも大切なのはその療法が醸し出す「雰囲気」だと喝破した（林・かしま, 2012, 黒木・かしま, 2013, 柳瀬, 2019）。精神医療と言語教育の分野は異なるが、実践者として神田橋に共感する筆者は、受講生の「不随意運動」（表情変化など）＞「随意運動」（身振りや発言のトーンなど）＞「発言内容」（言語化されたメッセージ）の優先順位で学習者を観察することを授業中の最重要課題の一つにしている。授業を効率よく計画通りに進めることを最優先するなら、受講生が活動する間は、教師は受講生の様子を観察することなく教卓で次の活動などの準備をし、タイマーの（安っぽく耳につく）アラーム音と共に活動をストップさせるべきなのかもしれない。だがそのようなやり方は、教師の観察力を育てず、教師と学習者の間の偶発的で人格的な交わりを阻害してしまう（柳瀬, 2022, 2023a）。ゆえに筆者は活動終了のタイミングは「雰囲気」という客観的・第三者的には同定し難い基準にしたがっている。

2.5 AI・ウェブリソースの共有

英語に初めて接する初級者と異なり、中級者以上の学習者は多種多様な英語に接する必要がある。そのため筆者は、AIとウェブリソースを最大限活用した。多くの日本人英語学習者は、英語発音の中にあるさまざまな差異によって聞き取りに失敗してしまう。よって中級者以上のリスニング教材は、1つの学習項目に対しても多くの例を多くの声で提示すべきである。しかし、市販の教科書の多くは、1つの学習項目に対して1つか2つの例文を1種類の声で提示しているだけである。そこで筆者は、「アクティブリスニング」の補助教材をAIで作成し多種多様な例文と音声で提示することにした。

音声合成のAIにはさまざまなものが存在するが、筆者は少数の基本的な機能を比較的快適に使用することができるAIを見つけた¹⁷。それで作った音源を公開するために有料版を私費で契約することにした¹⁸。このAIは英語変種について、米国・英国・オーストラリア・インドの英語をもっていた。英語変種にまつわる課題については後に述べるが、筆者は英語変種については『英語の発音パーフェクト学習事典』と同じように米国英語に固定した¹⁹。米国英語の声は約40種類提供されていたので、例文ごとに声の種類を替えて学習者に米国の標準的な発音内の差異に慣れさせるようにした。

音声の種類をそのように決めたとしても、肝心の英単語・英文の例を多く提供しなければならぬ。筆者が敬愛する（元）中学校英語教師は、1つの音素の違いだけで意味が変わってくるミニマル・ペア（例：“bug”と“bag”）を立板に水のようにたくさん示す。日頃の発音指導のたまものである。だが筆者にはそこまでの経験知がなく、母音と子音の指導のためにはミニマル・ペアを数多く見出

する必要があった。いや、ミニマル・ペアとまでもゆかずとも、ある特定音素を含む単語を多く見出すことさえもそれほど容易ではなかった。言うまでもなく特定の音素を例示する単語は、その音素がわかりやすい位置に配置され、かつその音素と混同されかねない音素を含まないものでないといけない。そうなると特定音素の例示に適した単語およびミニマル・ペアを数多く見出すことにもかなりの時間がかかることが予想された。

だがその時間を劇的に減少させたのが ChatGPT であった。筆者は Python や C++ などのプログラミング経験などはもっていなかったが、登場後数カ月後の ChatGPT の英語教育への活用について試行錯誤で可能性を探っていた²⁰。特定音素についての教材開発で ChatGPT を活用したところ、ミニマル・ペアや例示単語を、ウェブ検索で見つけたり自力で考案したりする時間とは比較できないぐらい短時間で見つけることができた。もちろん ChatGPT の出力は常に完璧なものではなく、関係のない項目が混じっていることも多くあった。しかしそれらを除去することは容易である。かくして、筆者は母音と子音に関してのリスニング補助教材を、AI を活用して約 1 週間で作成した。もし AI がなく、筆者が自力でミニマル・ペアと例示単語を選定し、その発音の録音を英語母語話者に頼んだら、おそらく数ヶ月はかかったであろう。筆者の作成した教材は、個人ブログで公表し誰でも使えるようにしている（本稿の「付録」参照）。AI は、短時間で、複数の例が複数の声で提示される教材を多くの学習項目に対して作成することを可能にした。

また筆者は受講生に対しても AI アプリを活用することを促した。特にボトムアップ型のリスニングのためには、Language Reactor²¹ とハヤえもん²² のインストールを勧めた。これらのアプリは、学習者がパソコン上で英語リスニング学習するインターフェイスを劇的に向上させる。

AI 利用だけでなく、筆者はウェブリソース（既存の YouTube 動画など）の活用も勧めた。英語学習は世界的なマーケットをもっており、（英語学習者の最大の共通言語である）英語で英語学習を解説する YouTuber の中には、無料提供とは信じられないぐらいの品質の解説動画を提供している者も少なくない。だが YouTube というメディアは、人気動画を次々に勧めることを重視しているため、YouTube チャンネルは動画を体系的に整理しているとは言い難い。そこで筆者は、信頼できる YouTuber を何人か選び、そのチャンネルの動画を受講生の学習ニーズに即して整理したブログ記事を作成した。それらのページも本稿の「付録」に一括して掲載している。

今後の課題としては、ボトムアップ型指導の項目を体系化して、受講生にわかりやく提示する必要がある。(1) 母音・子音→(2) 同化→(3) 脱落→(4) 連結→(5) リズム・イントネーションの順序を示しただけでは受講生にとって不十分である。それぞれの段階でどんな項目を学ばねばならないかを、できれば 1 つの表にまとめることは、受講生に学びの目的と到達具合を自覚させる格好の手段の 1 つとなるだろう。筆者は現時点までにそれを整理できていないことを非常に反省している。

3 トップダウン型指導の実践とその反省

細部で聞き取れないことが少々あったとしても意味を推測しながら聞き通すトップダウン型のリスニング指導についての筆者の実践は、「教師推薦サイト」と「受講生推薦サイト」の共有と、「英語変種の偏り」と「テスト形式リスニング」についての反省、の計 4 点でまとめることができる。

3.1 教師推薦サイト

2023年度前期の授業での主なトップダウン指導は、教師が推薦する英語動画サイトを紹介することだった。その紹介によって、受講生が宿題でそのサイトを興味を持って視聴しポर्टフォリオに学びをまとめることを目指した。教師推薦サイトについても、上で説明した英語の音声的特徴と同じように、2023年度前期に実際に行ったリストではなく、その実践の反省を踏まえた上で、現時点で筆者が適していると考えるリストを以下に提示する。

1の「入門用」のサイトは、英語リスニングを非常に苦手とする受講生のためである。これらのサイトの英語の速度は、熟達者からすれば奇異に思えるほど遅い。だが、受講生の中にはこの程度のスピードから開始して少しずつ自信をつける必要がある者も存在する（なお授業の際は、中級者以上にはTEDなどの他のサイトを聞いてもよいと勧める）。

2のKhan Academyは、米国の高校までの学習内容を、算数・数学、科学、芸術、人文学、社会科学、計算機科学などの幅広い分野にわたって解説する動画サイトである。本学の受講生にとって

表2 トップダウン型リスニングのための教師推薦サイトとその提示順

	カテゴリー	サイト名	URL
1	入門用	VOA Intermediate	https://learningenglish.voanews.com/p/5610.html
		News in Levels	https://www.newsinlevels.com/
2	既習内容	Khan Academy	https://www.youtube.com/c/khanacademy
3	教育用（一般）	TED-Ed	https://www.youtube.com/@TEDEd
		Kurzgesagt	https://www.youtube.com/@kurzgesagt/featured
4	教育用（文系か理系）	5 Minutes	https://www.youtube.com/@5minutes762/featured
		Knowledgia	https://www.youtube.com/@Knowledgia
		Mind Your Decisions	https://www.youtube.com/@MindYourDecisions
		3Blue1Brown	https://www.youtube.com/c/3blue1brown/featured
5	大学・OCW	世界の有名10大学のYouTubeチャンネル	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/10youtube.html
6	科学（最先端）	Science Podcast	https://www.science.org/podcasts
		Nature Podcast	https://www.nature.com/nature/podcasts
7	英語変種1（第1言語としての英語）	アメリカ以外で英語を母語としている人々が多い国々の英語	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/1.html
8	英語変種2（第2言語としての英語）	植民地時代の影響で英語を主要言語の1つとして使っている国々の英語	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/2.html
9	発展1：グローバルサウス出身のスタンダップコメディアン	Trevor Noahらのスタンダップコメディアンから柔軟な知性と巧みな話芸を学ぼう	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/trevor-noah.html
10	発展2：映画	映画で学ぶアメリカ英語の発音とリスニング（Rachel's English）	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/rachels-english.html

もこのサイトの内容の多くは「既習内容」となるため、トップダウン型リスニングの典型例として2番目に掲載した。

3と4は啓発的な解説をする教育用サイトである。3の「教育用（一般）」は、10分以内の短い時間で学術的知見を啓発的に伝える。内容の中には受講生が知らないものも含まれるので「既習内容」の次に配置した。4の「教育用（文系か理系）」は、歴史を扱ったサイトと数学と科学を扱ったサイトであり、3よりも細分化されたトピックを扱っていることが多い。文系の話題の中でも特に歴史を選んだのは、異文化コミュニケーションではしばしば歴史的教養が信頼の基盤になるからである。もし日本人英語話者が歴史的に重要な人名・地名・事件名などをカタカナ語発音でしか知らなければ、英語話者にはその日本人が歴史について無知だと映る。したがって人文・社会のトピックでも世界各地の歴史を扱ったサイトを優先した。筆者としてはこれらのサイトは理系の受講生にも見てほしいと願っている。とはいえ、直近の興味が理系科目にしかない理系受講生のためには、数学や科学のやや高度なトピックが扱われているサイトを選んだ。

5は、受講生の留学に対する興味を高めることもねらって筆者が作成したブログ記事である。*Times Higher Education* 誌の World University Rankings 2023 に掲載されたトップ10大学²³のサイトから受講生のために有益と思われるページにリンクをはった。リンクは、簡単な学部・大学院紹介のページにつながるものもあれば、OCW（Open Courseware）のページに至るものもある。受講生が個々の興味・意欲・能力に応じてアクセスし、海外の大学で実際に使われている英語に親しむことが狙いである。

6は、自然科学の一流誌のサイトが提供するポッドキャストに多くの受講生が挑戦することを望んで掲載した。ポッドキャストの多くは英文書き起こし（transcript）も提供していることもあり、受講生がある程度の科学知識をもっているならそれなりに聞くことができる。なお受講生には、挑戦して無理と判断したならばその他のサイトにアクセスしてよいと伝える。

7と8は、今回の実践の中の大きな反省点の一つになった、教材が米国英語に偏ってしまっていることを是正するために受講生に勧めるサイトである（反省点については以下の3.3で改めて述べる）。

9と10は発展編である。学術英語ではないが、英語使用者がやがては直面するコミュニケーションの問題について予め知っておくために設置している。9のスタンダップコメディは、舞台の上で一人が行う話芸であるが、日本の芸人と異なり、英語圏のスタンダップコメディアンは、政治的・社会的な問題（特に人種問題）について積極的に発言する。ここで選んだスタンダップコメディアンは、一般人がさまざまな思惑から発言できない事柄を、独自の知的分析に基づく解釈を示すことで笑いに昇華させている。これらのスタンダップコメディアンの分析と解釈は、彼らがグローバルサウス出身であることにも影響を受けている。彼らは、米国や英国の英語とは明らかに異なる英語変種の発音で、英語圏の思い込みの不合理さを笑い飛ばす。日本人が英語圏で英語を使う場合、その発音や発想から非欧米圏の話者とみなされるが、その際に「外国人なまり」で堂々と英語圏の常識を知的に相対化するスタンダップコメディアンは、日本人英語話者のロールモデルの1つとなると思い採択した。

実際、前期の授業ではこの反響は大きく、受講生の多くが授業で紹介した以外のスタンダップコメディを視聴してその感想をポートフォリオに掲載した。だが、その感想の中のある1人の「授業で紹介された動画の最後のオチだけがわからなかった」という述懐は、イントネーション（およびそれに伴うトーン）の理解が不十分な受講生が多いことを筆者に再認識させた。実際、ボトムアッ

ブ型指導の最終局面でイントネーションを扱った際、少なからずの受講生はイントネーションを音の高低の物理的变化としてしかとらえず、微妙なニュアンスを伝えることを実感できていなかった。また、数々の例示と解説でニュアンスを実感できるようになったとしても、自らそのイントネーションを表現することはさらに困難だった。しかし京都大学自律的英語ユーザーインタビューに登場した博士課程後期の大学院生（物理学専攻）も言うように（安留，2022）、対談する自然科学者は、単なる情報・知識だけでなくその情報・知識に伴う感情も伝えあっている。主に学術英語を使う外国人英語話者にとっても、イントネーションの微妙な差異の理解と表現は重要である。その点において、イントネーションが重要な役割を果たすスタンダップコメディや次に示す映画は、「アクティブリスニング」において貴重な教材となると筆者は考えている。

10のサイトは、映画から米国英語発音を学ぶYouTube動画を整理したリストを掲載している。このYouTube動画の発音とイントネーションの分析は徹底的で、英語の音声的特徴についてのボトムアップ型学習の総復習ともなっている。映画の英語は、日本人英語話者が研究発表会場を出て、懇親会などで英語母語話者ばかりと歓談するといった状況の準備となる。また、学習者が今後、英語での映画を楽しみながらの英語の教材とすることを可能にする。ある受講生は以前大好きであった映画の30年以上ぶりの続編（Top Gun: Maverick）について興奮気味に語っていた。彼は、以前のように字幕を通じてではなく、音声を通じて直接的に映画の台詞を理解し、その口調の意味合いなどもわかるようになったことが、このうえなく嬉しいと頬を紅潮させながら語っていた。研究者同士でも最後に深い信頼を築くには、細やかな感情の共有が必要となる。9と10のような教材は、学術英語を主目的とする「アクティブリスニング」においても重要だと筆者は考えている。

3.2 受講生推薦サイト

筆者は受講生への毎週の課題として、上の教師推薦サイトか、個々の受講生が好きな英語動画サイトを視聴して、その学びの成果をポートフォリオにまとめることを求めている²⁴。後者も勧めた理由の一つは、京都大学自律的英語ユーザーインタビューでのある学部生の述懐（立山，2022）に啓発されたからであった。同氏は特に留学などの機会を得ることなく日本できわめて高い英語力をつけた。YouTubeなどを見ることについて同氏は、「英語をしっかりと聞くぞ、理解するぞ」よりも、「英語は聞き取れたら、よくやったものだ」くらいの感覚で、純粹に楽しむ気持ちで見ていると述べる。「英語は完全に理解しなければならない」という思い込みが日本人の多くを英語から遠ざけていると同氏は考えている。多くの英語教師はリスニングの後にはすぐ理解チェックの小テストなどを行うが、それも過度に行えば、学習者が生涯にわたって英語を学び使うことを楽しむ可能性を摘んでしまうかもしれない。筆者はこの述懐に英語教師としてのバイアスを改めて正されたように思い、受講生が自由に英語動画を選ぶことも積極的に奨励した。

勤勉な受講生は、教員推薦動画と自分の好きな動画の両方を選んだが、ともすると欠席しがちな受講生の多くは自分の選んだ動画についてのみポートフォリオに記入した。だが、受講生が選ぶ動画は確実にクラスの視野を広げた（そもそも表2のいくつかは受講生に教えてもらったものである）。動画の例には、ジャズドラマーによる技法解説、英語学習系の人気日本人YouTuber、日本語が非常に上達した外国人への英語でのインタビュー、ChatGPTの使い方、（筆者の知らない）スタンダップコメディアン、米国各地の方言、Steve Jobsなどの有名人のスピーチ、受講生の指導教員の恩師が英語で行った学術講演などがあつた。ポートフォリオのまとめを見る限り、受講生は英語動画を楽しむ文化を経験できた。だが、そのリスニング力は、一般的にテストで問われる形式で

のリスニング力に十分にはつながっていないかもしれない。その懸念は、次々節の3.4で述べる。

3.3 反省1：米国英語への偏り

筆者は、2.5で述べたように教材をさまざま例文と声で提示することを方針とした。他方、英語変種は米国英語だけに限定することで、受講生にとってのリスニングの困難度が上がりすぎることを避けた。米国英語を選んだのは、教科書が米国英語を採択しているというのが直接的な理由である。しかし背景要因としては、米国の文化をグローバルスタンダードだと誤解してしまう日本の一部の風潮に筆者も流されてしまっていることがある。

世界のさまざまな英語変種の中で米国英語ばかりを規範とすることは、学習者の現実認識に色眼鏡をかけてしまう。本学でも1回生のうちに2回TOEFL-ITPを大学の予算で受験させ、リスニング力をもっぱら米国英語の基準で測定している。だが、例えばもっぱらアジア圏で英語使用をしている実務者がTOEFLを受験したら、そのリスニング得点は存外に低いかもしれない。しかしその低い得点は、その人の現実世界でのリスニング力の低さを必ずしも意味しない（グローバル化が進んだ現代世界は一元化せず多元化している）。さまざまな理由から学校では米国英語が教材に採択されることが多いにせよ、米国英語選択が一般的な「英語力」を測るとされる大規模標準テストにも適用されると、学校英語教育体制が、米国英語の覇権的地位の維持と発展を助長しているとも批判できるだろう。

筆者ももちろん米国英語偏重には問題意識をもっており、2023年度前期の授業ではグローバルサウス出身のスタンダップコメディアンによる植民地主義批判の動画を特に紹介した。その他のスタンダップコメディアンもそれぞれの英語変種で語っているので、英語変種の紹介はそれなりにできたのかもしれない。だがその程度の紹介では、漠然とした「空気」のようになり私たちが批判意識を失いかけている米国英語覇権主義について再考するには不十分だろう。

グローバルサウスの台頭が今後の世界史的潮流となりうるかもしれない現状では、英語教師は教材での英語変種の選択が偏見に結びつかないように配慮する必要がある。とりあえず次の「アクティブリスニング」では、表2にも示したように英語変種を主題としたトップダウン型指導を2週にわたって行う。1つの週で扱うのは、英国やオーストラリアといった英語を第1言語（母語）として使用している者が多い国々の英語変種である。もう1つの週では、旧英国植民地圏のように現在英語が第2言語として日常的に使われている国々の英語変種を取り上げる。

3.4 反省2：テスト形式リスニング

セメスター最後には、シラバスの共通部分にしたがって、英語による短い講義を聞き取る期末試験を行った。講義の内容は受講生間の公平を期すため、これまでどの受講生もポートフォリオで報告しなかった分野の講義にせざるを得なかった。また聞き取りの課題も、シラバスにしたがい「概要をメモした上で講義の概要を英語でまとめよ」となった。受講者からすれば、特に興味のない話題が突然提示され、それについて自らの問題意識からではなく「一般的に」まとめることが求められたわけである。これは自分の興味と問題意識に基づき理解を進める自然なリスニングと異なる、人工的なテスト形式のリスニングである。また他にも、期末試験と受講者の日頃の学びの違いには、日頃なら1) Language Reactorなどで聞いた内容を視覚的に補完できる、2) 望めば動画を繰り返し聞くことができる、3) まとめの執筆の際はAIを利用することができる、といった点もあった。そういった違いもあったのか、その試験の出来は、あくまでも筆者の主観的判断であるが、日頃の

授業での受講者の様子から予想したよりも低かった。

2023年度前期のトップダウン型指導についてまとめる。教師推薦サイトと受講生推薦サイトの共有によって受講生が英語で知的欲求を満たす経験をさせた点では成功した。だが、英語変種の偏りとリスニングテスト形式での聞き取りには改善の必要性を覚えた。米国英語以外の英語変種の提示が不十分であった点の改善については上で述べたので、以下ではテスト形式でのリスニングの改善について述べ、本稿の冒頭で述べた教師と学習者が教室に集う意義について考察する。

4 トップダウン型課題でも同一課題で協働と競い合いを促すことの重要性

筆者は、英語教育の営みが大規模標準テスト対策に振り回されることに対して批判的な意識をもっている（柳瀬, 2023c）。だが、その反面、多くの受講生が直面する短期間のテスト得点向上という課題を支援する必要は感じている。長期的には望ましい学習習慣（楽しみながら学術的な英語を聞く）も、短期的な課題（テスト得点の向上）への対応に失敗したら、頓挫してしまうかもしれない。そうすると、「アクティブリスニング」も、聞く者の興味や問題意識とは無関係に英語音源が与えられ、その「一般的な」理解を問われる形式でのリスニング課題に対応しなければならない。以下、その対応方針について整理する。

先に予告していたように、筆者はボトムアップ型指導とトップダウン型指導を統合させるためには、後者の指導においても同一の音源を教室で聞かせ、それを題材に聞き取りの向上についてペアで多面的に学び合いと多様な競い合いを促すべきだと考えるにいたった。

ボトムアップ型指導においては2.4で述べたように、英語音声の聞き取りと再生における学び合いと競い合いが、受講生がリラックスした雰囲気の中で真摯に助言しあい互いから刺激を得る関係性を作り出した。学び合いと競い合いは、人格的な学び（柳瀬, 2023a）を求める学習者にとって有効な手段の1つである。また本学の教育理念である「対話を根幹として自学自習を促すこと」にもつながる。だがトップダウン型指導において、筆者は受講者の個々の興味や意欲を育てることを優先した。クラスで共有したのは、各人のポートフォリオの興味深い部分だけであり、共に同じ英語音源を聞いた上での学び合いと競い合いは行わなかった。しかし期末試験でのテスト形式でのリスニングの出来が、日頃のクラスの様子から予想できる水準に達しなかったことからすると、クラスでテスト形式のリスニングを行い、その理解について学び合いと競い合いを行うべきだったと今は考えている。

実は、筆者は2022年度に担当した「テストテイキング」の授業で、同一リスニング課題の学び合いと競い合いを実施している。この授業は、さまざまな事情で新学期2週目から筆者が急に担当することになったものである。筆者は、もともと担当するはずであった講師が定めた教科書を使うことになった。その教科書のリスニング課題は、米国大学への留学生が対応するレベルであり、日本人受講者にとってはかなり難しいものであった。その授業でも筆者は自ら信じる学び合いと競い合いの方法を取った。その時点で、筆者は英語の音声の特徴について現時点ほどの整理はしていなかったため、クラス共有の際の具体的指導は今回の「アクティブリスニング」ほどにはできなかった。だが、困難点をペアで確認してクラスで共有する教室文化は、学習者の「自分は聞き取れない」という自責の念を和らげ、互いの刺激からリスニングのコツを学び合うことにつながった。リスニングにとどまらない授業全体の評価ではあるが、「この授業は自分にとって意義のある授業と感じた」に対する回答は、4点満点で3.79点であったし²⁵、何より受講者の表情やクラス全体の雰囲気

気はこの授業がよい学びを生み出していることを示唆していた。

2023年度前期の「アクティブリスニング」では、受講生の自発的な英語動画視聴を促進することを尊重し、ボトムアップ型指導とトップダウン型指導の統合はスピーチ発表に託した。スピーチ発表は予想以上にうまくいったが、肝心のリスニングは、期末試験のテスト形式ではそれほどではなかったことは繰り返し述べているとおりである。今後は、セメスター終盤のスピーチ活動を、テスト形式のリスニングでの学び合いと競い合いに替えてゆきたい。その学びは、英語の音声的特徴の整理を経たものであるため、学び合いの質も高まることが期待できる。加えて、ノートテイキングの技法の指導も充実してゆけば、受講生はその成果でも具体的かつ個性的に競い合うことができるのではないだろうか。そういった方針に基づき現時点で考える授業計画は下の表3のようにまとめられる。

本稿の底に流れるテーマは、教室という物理的空間に、複数の学習者と教師が集うことの必要性を検討することであった。COVID-19によるオンライン授業を経て、多くの教師と学習者は対面授業の復活を欲した。だが対面授業が、もしオンライン授業で欠落した要因を満たさなければ、対面授業もやがて退屈な日常に戻るだけかもしれない。授業がオンライン化されて失われたものは、学習者の身体的表現力、教師の観察力、両者の関係性発展力、と整理できる（柳瀬，2022）。これらの喪失により、学習者のさまざまな反応（その一部は教師の予想外の反応）を受けて、教師が臨機応変に授業を目の前の学習者に適したものに修正していく「コミュニケーションとしての授業」が成立困難となった。教室に教師と学習者が集うには、学習者が安心して表情・身振り・声調などで自己表現でき、教師がそれを鋭敏に察知して授業を修正し、学習者が学びたいことと教師が提供す

表3 現時点での「アクティブリスニング」の授業計画

週	ボトムアップ型指導	トップダウン型指導
1	導入：授業の目標や教室文化についての説明、およびデジタル環境の整備など	
2	母音（第9章）	入門用：VOA, News in Levels
3	子音（第9章）	既習内容：Khan Academy
4	同化（第4章）	教育用1：TED-Ed, Kurzgesagt
5	脱落・子音連続（第7章・第8章）	教育用2：5 Minutes, Knowledgia, Mind Your Decisions, 3Blue1Brown
6	短縮形・破裂（第5章・第6章）	学術英語1：有名10大学のYouTubeチャンネル
7	連結（第3章）その1	学術英語2：Science, Nature
8	連結（第3章）その2	英語変種1：第一言語としての英語
9	リズム（第1章）	英語変種2：第二言語としての英語
10	イントネーション1（第2章）	発展1：グローバルサウス出身のスタンダップコメディアン
11	イントネーション2（第2章）	発展2：映画で学ぶアメリカ英語の発音とリスニング
12	ノートテイキング実践1：省略表記に慣れる	
13	ノートテイキング実践2：ノートの位置情報の活用	
14	ノートテイキング実践3：ノートの編集と概要執筆	
15	期末試験	
16	フィードバック週	

る知的内容がより密接に連動することが可能でなければならない。それが可能であって初めて、複数の人間が教室に集う意味が生まれる。

2023年前期の筆者の「アクティブリスニング」実践のボトムアップ型指導では、受講者は学びに伴う自然な情動を表現し、教師もそれに対応することができた。受講者はリラックスした雰囲気のパアで話し合い、教師はその成果をクラスで共有し解説を加えた。だがトップダウン型指導では、受講者の個性的な関心を尊重するあまり、教室でテスト形式のリスニングを行う活動は行わなかった。

だが多くの学生が受験しなければならない大規模標準テストのリスニングは、受験者の興味や関心とはまったく独立に、さまざまな話題が次々に聞き取り課題として提示される。さらに受験者なりの問題意識ではなく、あくまでもテスト作成者の問題意識から質問がなされ答えが求められる。他方、現実世界のリスニングは、聞き手が熟知する文脈の中で、聞き手が自らの知識と関心でもって聞き取りを進めその内容をまとめる。テスト形式のリスニングは、言ってみるなら人工的で特殊な言語ゲーム²⁶である。だが多くの大学生・大学院生がこの不自然な言語ゲームを受けざるをえないのが、大規模標準テストが普及してしまった現状である。特定の英語変種での大規模標準テストに権力が集中してしまうことの是非については今後も人々が中長期的に検討する必要がある（柳瀬, 2023c）。だが短期的には大学英語教師は、大規模標準テストの形式でのリスニング対策を、リスニングの授業の受講者に提供しなければならない。

そういったいわゆるテスト対策に、少しでも学習者が個性を出しながら人格的な交わりをできるのは、やはり学び合いといった協働学習であろう。協働学習 (collaborative learning) は、分業・協業的学習 (cooperative learning) と異なり、学習者自身が学ぶ課題や方法を見つけ出す²⁷。協働学習の自由とそれに伴う責任は、学習者の自律性を高める。自律的な複数の学習者が同じ課題に取り組む時、そこには必ずから競い合いが生じる。ただこの競い合いは自由で創造的な状況で行われるため、条件が一律に定められた一斉競争ではない。学習者を1位から最下位、あるいは100点から0点といった一本の数直線に並べない。個々の学習者の強みも弱みも異なる。それらが組み合わせることにより、一人ではできなかった課題が達成される時、学習者は他人の強みを評価し自分の弱みを知る。その自覚は、他人の強さを自らのものにしようという欲求にしばしばつながる。自由な学び合いは社会的存在としての人間の喜びであり、多様な競い合いは動物としての生存本能の名残であるといえよう。学び合いと競い合いは、参加者それぞれが自らの個性を知ることにつながる。この点で、学び合いと競い合いはきわめて人間的な学習である。このような学びがなされるなら、教室にまで来るといった物理的コストを払ってまでも複数の人間が同じ教室に集うことの意味もある。「アクティブリスニング」は、リスニング指導の授業としての固有の教授テクニックを必要とする。だが同時にこの科目も、自由な学び合いと多様な競い合いといった人間にとって根源的な営みを活かしながら今後も発展してゆくべきであろう²⁸。

注

- 1 ここでの「学び合い」は、広い意味での協働学習 (collaborative learning) を指すもので、課題に取り組む学習者が必要や欲求に応じて学習者同士で話し合い助け合うことを意味する。柳瀬 (2020) は、西川 (2016) の『学び合い』の理論と方法に啓発された英語ライティング授業の実践報告を行ない、その中でこの教育方法についてある程度まとめている。本稿は、その柳瀬 (2020) の続編の実践報告である。なおその報告では、『学び合い』という二重括弧付きの表記をしているが、それは

西川（2016）の表記にならったものである。本稿では一つの協働学習の形としての学び合いを扱うため、特にこの語に二重括弧などを付けることはしない。

- 2 「競い合い」は“competition”の訳語として考えている。この英語については福澤諭吉の「競争」という翻訳語が定着しているが、筆者としては「争」という字の否定的含意を嫌った。この「争」という文字を穏やかでないと見るのは、『福翁自伝』によれば「その時の徳川幕府の頑固な一例」であるが、筆者としては「文明開化」以前の感覚の方に親近感を覚え「競い合い」とした。また「競争」ではなく「競い合い」と表現することによって、学習者が行うのは標準化された一斉競争ではなく、それぞれの個性によって多様化された競い合いであることも強調しようとした。
- 3 E3 科目は、英語技能を指導する科目であるにもかかわらず、カリキュラム上は外国語科目群ではなくキャリア形成科目群に属している。後者の科目群の科目を多くの学部が卒業要件認定科目として積極的に認めないこともあり、E3 科目の受講者は伸び悩んでいるが、この問題は本稿ではこれ以上述べない。
- 4 E3 検討 WG は、2019 年度に設立した E2/E3 検討 WG を 2020 年度に再編したものである。
- 5 加えてこの答申は、スピーキングの教育が本学の英語必修科目で不足していることも指摘しているが、スピーキング科目の不在について本稿はこれ以上述べない。
- 6 「アクティブリスニング」は答申では“Basic Listening”と呼ばれていた。
- 7 試行実施期間は当初 1 年間だけを予定していた。だが、英語教室の教務委員が、年度途中で授業が 1 クラスから 5 クラスに増えると、非常勤講師も含む担当講師の確保が非常に困難になるという実務的な問題を訴えた。その訴えを受けた英語部会は、試行期間を 1 年半に延長することを了承した。
- 8 「アクティブリスニング」の 2022 年度後期の担当講師は吉田亞矢講師であったが、吉田氏は残念ながら 2022 年度末をもって本学を離れた。筆者は 2023 年度の前期からこの科目を担当し、その経験から本稿を執筆している。担当と執筆の際には吉田氏からの口頭報告と資料を参考にした。ここに吉田氏への感謝の念を表す。だがもちろんのこと、本稿の瑕疵はすべて筆者の責任である。
- 9 初稿執筆時点で、国際高等教育院が統括する授業アンケートの結果は担当教員には公開されていなかった。だが、改訂稿執筆時にはその結果（単位合格者 12 名のうち 10 名の回答）が得られていたので簡単に報告する。Q8 の「総合的に見て、この授業に満足している」に対しては、「あてはまる」が 6 票、「ややあてはまる」が 3 票、「あまりあてはまらない」が 1 票であった。自由回答は 4 名から得られた。以下が全文である。「毎回の課題は学生の自主的な学習を促すものだったので楽しんで学習を行えた」、「実際に発音の練習ができる授業は珍しく、英語学習の上で非常に効果的だと思った」、「先生が生徒に対し真摯に向き合ってくれ、時には自分にアドバイスをくれたりしたのが、大学の授業ではなかなか経験したことがなかったとのでとても新鮮で良かったと思います」、「当初の期待通り英語のリスニングについて実践の機会が多く設けられていたこと。また、特に良かったのは言語学習における AI の活用方法を教えていただけたことである。また、英語教育に限らず一種の『学びの姿勢』というものを得ることができた。上記の点から、個人的には多くの学生に受講して欲しいと感じる講義であった。実際には 1 限ということもあってか受講者は少なかったが、何かこうした受講生の声というものもクラシスなどで見れると良いのではと感じた」。
- 10 だが筆者はそもそも、最初に決めた授業細案を厳密に実行する教育実践に対して非常に懐疑的である。実践者の力量とは、現場の予想外の反応に臨機応変に対応することにあるからである（Schön, 1991）。細部にいたるまで計画を厳密に実行することは、比較実験研究には必須である。だが、教育現場でそれを行うことは、学習者の実情を無視することにはほかならない（柳瀬, 2017）。教師が予想しなかった学習者の質問や誤解あるいは無関心などに対応していくことが実践者としての力量である（柳瀬, 2022）。したがって筆者は、教育実践を科学的に再現可能な操作と認識することは、実践と科学の両方を損なうと考えている（檜葉・柳瀬, 2020, 柳瀬, 2021）。教育実践はあまりに複合的であり、厳密な再現可能性を期待するべきではない。
- 11 イントネーションについて 2 週にわたって指導するのは、受講生の多くがイントネーションを単に音の高低変化としか捉えていないからである。この論点については後に、スタンダップコメディを

教材にした説明の際に述べる。なお連結にも2週 of 授業を使うのは、この教科書の連結が例文を豊富に掲載しているからである。

- 12 筆者は、自らの判断ミスなどを比較的正直に受講生に伝え謝る方である。だが、難しかった連結の授業の次の週に、“Did you”といった中学生でも知っているような同化の事例を取り上げたときの困惑は大きく、筆者は受講生に「ごめん、この章は先にやるべきだったね」と正直に謝ることはできなかった。セメスター開始以前に十分に受講生にとっての学習内容の困難度をきちんと予測できなかったのは教師としてあまりにも恥ずべきことだと思ったからである。筆者は「あまり教師が自分の非を認めすぎると、受講生からの信頼を失ってしまう」と心の中で自己正当化して、そのまま授業を続けた。だが、授業準備における教室の最重要課題は、学びの際の学習者の心の動きを予測することであることは間違いない。このエピソードにおける筆者は明らかにこの最重要課題に失敗していた。
- 13 受講生は2人で話すこともあれば、3～4人で話すこともある。だが表記をいちいち「ペアやグループ」と書くのは面倒なので以下「ペア」としか書かない。
- 14 周知のように、言語技能の獲得には年齢的な制約があり、いわゆる「臨界期」を超えた後に、外国語の発音などを母語話者並みに習得するのはきわめて困難である。
- 15 筆者は、ボトムアップ型指導とトップダウン型指導を統合する課題としてセメスター最後で受講生に1-2分のスピーチを準備させクラスで披露させた。だが3.4の反省を踏まえ、今後はこの活動を止め、ノートテイキング技術の指導をより徹底させる予定である。
- 16 西川(2016)の『学び合い』では、このように教師が学習者の自由な活動を一齐に遮ることはほとんどない。前にも述べたように筆者の実践は、西川らの実践に影響を受けたものであるが、西川の指導方法を忠実に再現しているものではない。
- 17 音読さん (<https://ondoku3.com/ja/>)
- 18 私費で契約したのは、購読料金が月に1,000円以下と比較的廉価だったことが最大の理由だが、大学予算を使うと手続きに数日間の時間がかかり、すぐに教材作成ができないという理由もあった。しかし今後、もし英語教師がAIを積極的に利用するとなれば、大学がこういった契約を一括して行う必要性も出てくるだろう。
- 19 『英語の発音パーフェクト学習事典』の音源は「米・英」となっているが、英国英語は付録の一部で出てくるぐらいであり、実質的には米国英語をモデルとしている。
- 20 英語教育でのChatGPT活用については柳瀬(2023b)でまとめている。また、学術英語ライティングについては、2023年9月8日にオンラインで開催された京都大学全学教育シンポジウム(「生成AIの大学教育での現状と問題点」)で、「大規模言語モデルAIが促す英語教育の再定義：進化する組織と混乱する組織」でも報告した。
- 21 Language ReactorはChromeブラウザの拡張機能であり、これをインストールすることでYouTubeおよびNetflixを視聴する際に、英語字幕・日本語字幕の画面表示、直前の箇所の聞き直し、字幕ごとの再生一時停止、英語スクリプト・日本語翻訳の一括出力などの英語学習に便利な機能が使える。Language Reactorについては国際高等教育院i-ARRC英語教育部門ウェブページに案内記事を掲載している(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/consultation_jp_FAQ#frame-603)。
- 22 ハヤえもんは、MP3プレーヤーの一種で、自分のハードディスク上に収納した音源に対して、カセットテープレコーダーのように数秒だけの巻き戻しをしたり、その再生スピードをコントロールしたりすることができる。教室教卓で音源を操作する教師にとっては必須の無料アプリともいえる。ハヤえもんについても英語教育部門ウェブページに記事をまとめている(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/consultation_jp_FAQ#frame-640)。
- 23 <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2023/world-ranking>
- 24 毎週提出させるポートフォリオは、フォーマットを定め、一週間の英語学習時間(授業時間も含む)・英語の自主学習の総評・視聴した英語動画・学習した事項の具体点などを英語で書かせた。ただしこれらの記述においては、受講生の英語学習の継続化(つまり自学自習の習慣形成)を優先させた

ため、あくまでも自分の興味関心に即したまとめを求めた。そもそも本科目の目的は「リスニング能力の向上により、主体的に英語での講義に参加できることを目指す」であった。現実の英語講義への参加は、学習者の強い興味関心があってはじめて実現されるものである。よって筆者は、学習者の興味関心を育てることを優先させた。ポートフォリオの提出の総計は全成績の30%とし、自学自習の習慣をつけることの重要性を成績評価の割合でも示した（今後はスピーチプレゼンテーションを止めるのでその20%を加えてポートフォリオは全成績の50%にする予定である）。受講生が英語で執筆する際は、DeepL, QuillBot, ChatGPTなどのAI利用を許可し、とにかく英語で表現することを奨励した（ポートフォリオの最後には使用したAIの種類と程度を申告させた）。複数の熱心な受講生は毎週3ページ以上のポートフォリオを書いた。すべての受講生のポートフォリオの記述から、筆者は他の受講生にも有益と思われる事項をスクリーンショットに取り、次の授業の冒頭で披露してコメントした。受講生が見た英語動画は、筆者は最低数分間だけでも見て授業中にコメントを述べ、受講生の動画選択をできるだけ肯定的に評価した。このポートフォリオの提出とフィードバック返却は、共に学び合う文化を育てることにつながったと思われる。

- 25 この数字は国際高等教育院による匿名授業アンケートの結果である。ちなみに回答者は、4つの選択肢のうち、11名が「4」（あてはまる）を、3名が「3」（ややあてはまる）を選び、否定的な回答（「2」と「1」）はゼロであった。
- 26 哲学のウィットゲンシュタイン（Wittgenstein, 2009）が提示した「言語ゲーム」という用語は、言語が含まれる人間のさまざまな営みを指す。この概念により、言語を人間の暮らしから独立した独自の記号体系として分析する一部の言語学の考え方が相対化される。「言語ゲーム」というとらえ方は、言語について特定の社会的・歴史的制約の中で使われる言語について考察することを促進する。
- 27 ここでは collaborative learning と cooperative learning をかなり対比的に理解し、後者を敢えて「分業・協業的学習」と訳している。分業・協業的学習では多くの場合、「Aさんは○○をやって、Bさんは△△をやる」などと、課題の範囲は予め教師によって定められている。
- 28 「アクティブリスニング」の今後の課題の1つとして、この科目を「I」と「II」に分割し、リスニング力向上のための授業を2回受講することを望む学生のニーズに対応することが考えられる。総じてE3科目は定員数よりもかなり少ない受講生しか集めていない。その大きな理由は、前述したようにE3科目がキャリア形成科目群に所属していることであるが、もう1つの理由としてE3科目を受講する少数の熱心な学生のニーズに応えられていないこともある。英語科目は新規の知識の習得というよりも、英語の学習と使用の習慣形成という側面が大きいので、少数の学生は単位としては認められないことを承知の上で同じE3科目を「単位不要」として受講する。もし「アクティブリスニング」を「アクティブリスニングI」と「アクティブリスニングII」に分割したら、「I」で基本的な、「II」で応用的・発展的な聞き取り技術を教えることができ、学生もその両方の単位を獲得できる。前者はこれまでE3科目を受講しなかった層のニーズ（例えば個々の音素と音素の同化・脱落・連結など）に応え、後者は熱心な英語学習者のニーズ（例えばイントネーション、ノートテイキング、語彙拡張など）に即することができるだろう。もちろんそのような分割をする場合、「I」と「II」の差別化を図り、学習者に益するシラバス共通部分を作成する必要がある。

参考文献

- E3科目検討WG（2021）「E3科目改善答申（WG最終版）」国際高等教育院内部資料
- 樫葉みつ子・柳瀬陽介（2020）「当事者研究から考える校内授業研究のあり方」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要』7, 105–114. <https://doi.org/10.15027/50180>
- 神田橋條治（1990）『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版社
- 神田橋條治（1994）『追補 精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社
- 黒木俊秀・かしまえりこ（編）（2013）『神田橋條治医学部講義』創元社
- 立山結衣（2022）「もし周りが「英語なんて自分には無理」という人たちがばかりでしたら、自分だけ

- 英語に力を入れることも避けていたかもしれません」京都大学国際高等教育院附属学術言語教育センター英語教育部門ウェブサイト https://www.i-arcc.kyoto-u.ac.jp/english/interviews/transcripts2022_jp#frame-718
- 西川純 (2016) 『『学び合い』の手引 ルーツ&考え方編』 明治図書
- 林道彦・かしまえりこ (編) (2012) 『神田橋條治精神科講義』 創元社
- 深澤俊昭 (2015) 『英語の発音パーフェクト学習事典 [改訂版]』 アルク
- 福澤諭吉 (2017) 『福翁自伝』 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/1864_61590.html
- 安留健嗣 (2022) 「英語はツールであり、ツール以上のものです」京都大学国際高等教育院附属学術言語教育センター英語教育部門ウェブサイト https://www.i-arcc.kyoto-u.ac.jp/english/interviews/transcripts2022_jp#frame-708
- 柳瀬陽介 (2017) 「英語教育実践支援研究に客観性と再現性を求めることについて」『中国地区英語教育学会紀要』 47, 83–93. https://doi.org/10.18983/casele.47.0_83
- 柳瀬陽介 (2018) 「なぜ物語は実践研究にとって重要なのか—読者・利用者による一般化可能性」『言語文化教育研究』 16, 12–32. <https://doi.org/10.14960/gbkkg.16.12>
- 柳瀬陽介 (2019) 「学びのための対面コミュニケーションはどうあるべきか—精神科医・神田橋條治氏の実践知からの整理と考察」『ラボ言語教育総合研究所報 ことばに翼を Vol. 4』 <https://www.laboparty.jp/research/vol04.php>
- 柳瀬陽介 (2020) 「大学必修英語科目での『学び合い』の試み—「対話を根幹とした自学自習」を目指して」京都大学国際高等教育院紀要 3, 23–45. <http://hdl.handle.net/2433/250942>
- 柳瀬陽介 (2021) 「「教育実践を科学的に再現可能な操作と認識することは、実践と科学の両方を損なう」(シンポジウム：外国語教育研究の再現可能性 2021)」『英語教育の哲学的探究 3』 2021年9月11日 https://yanase-yosuke.blogspot.com/2021/09/2021_11.html
- 柳瀬陽介 (2022) 「逆境を活かす新勢力(創造的レジリエンス)は授業で育てる—身体表現からの偶発的コミュニケーション」村田和代(編)『レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育』 pp. 185–204. ひつじ書房
- 柳瀬陽介 (2023a) 「人格的コミュニケーションとしての授業」『京都大学教養教育実践研究会 第4回例会記録集』 4, 17–30.
- 柳瀬陽介 (2023b) 「「AIの導入で英語授業はより人間的になった—実践速報に基づく考察」(JACET中部支部大会基調講演)の録画とスライドを公開」『英語教育の哲学的探究 3』 2023年6月12日 <https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/ai-jacet.html>
- 柳瀬陽介 (2023c) 「『英語力』をこれ以上商品化・貨幣化するためにAIを使ってはならない—技術主導の問いから人間主導の問いへ」『早稲田日本語教育学』 35, 57–72. https://waseda.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1704950219732
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press.
- Chi, Z., Zhang, S., & Shi, L. (2023). Analysis and Prediction of MOOC Learners' Dropout Behavior. *Applied Sciences*, 13(2), 1068. <https://doi.org/10.3390/app13021068>
- Schön, D. (1991). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. Basic Books.
- Wittgenstein, L. (2009) *Philosophical Investigations* (G. Anscombe, P. Hacker, & J. Schulte, Trans.; 4th ed.). Wiley-Blackwell. (Original work published 1953)

付録

「アクティブリスニング」受講生のために筆者が作成したブログ記事

総括的リスト

【まとめ記事】英語の発音を自学自習できる YouTube 動画のリスト

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/youtube.html>

個々の音素について

アメリカ英語の母音についての簡単な解説

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_14.html

アメリカ英語の子音についての簡単な解説

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_15.html

アメリカ英語で子音が連続する場合

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_25.html

VOA によるアメリカ英語発音解説ビデオのリスト

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/voa.html>

アメリカ英語の個々の発音を学ぶための定番サイト：Sounds American

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/sounds-american.html>

音素の同化・脱落・連結などについて

無料 YouTube 動画の Elemental English でアメリカ英語の発音を学ぶ

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/youtubeelementalenglish.html>

映画で学ぶアメリカ英語の発音とリスニング (Rachel's English)

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/rachels-english.html>

Learn English with TV Series 楽しみながら英語を学ぶ

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/11/learn-english-with-tv-series.html>

イントネーションや洗練された表現などについて

イントネーションの重要性を自覚して、自分でも使い分けられるようになる—“English with Kim” の YouTube チャンネルから動画リストを作りました

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/english-with-kim-youtube.html>

YouTube チャンネルの mmmEnglish で、社会的に洗練された英語表現（およびオーストラリア英語）について学び始める

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/youtubemmmenglish.html>

Trevor Noah らのスタンダップコメディアンから柔軟な知性と巧みな話芸を学ぼう

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/trevor-noah.html>

世界の様々な英語

さまざまな英語発音に慣れる 1：アメリカ以外で英語を母語としている人々が多い国々の英語

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/1.html>

さまざまな英語発音に慣れる 2：植民地時代の影響で英語を主要言語の 1 つとして使っている国々の英語

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/2.html>

“Think in English” と “fluency” についての YouTube 動画リスト—英語を母語としない YouTuber の動画を中心に

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/11/think-in-english-fluency-youtube.html>

20歳でイスラエルからニューヨークに渡って英語の発音コーチになった Hadar さんの Accent's Way English with Hadar

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/20hadaraccents-way-english-with-hadar.html>

学術英語への対応などについて

世界の有名10大学のYouTubeチャンネル

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/10youtube.html>

Cajun Koi Academy が勧めるノートの取り方

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/cajun-koi-academy.html>

スピーキングについて

ChatGPT と音声で英会話する方法（上級者用）

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/chatgpt.html>

「ChatGPT 英会話・初級者用」のプロンプトです。中3～高2レベルの英語力で、ChatGPT と（音声）会話できます。（プロンプト Ver. 2 に改訂）

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/chatgpt31chatgpt.html>

英検1級などのスピーチ試験対策用の2種類のChatGPTプロンプト：スピーチアウトライン作成用とスピーチ実践・改善用（Ver. 1.1）

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/12chatgpt.html>

AIを活用した英語プレゼンテーションの練習方法

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/ai.html>

学習環境の整備について

英語学習のためのデジタル環境整備

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post.html>

International Phonetic Alphabet（IPA）で発音を学ぶ際に便利なサイト集

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/international-phonetic-alphabet-ipa.html>

アルファベットによる英語の発音表記法（Pronunciation respelling for English）

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/pronunciation-respelling-for-english.html>

Reflection on the Early Implementation of the New E3 Course, *Active Listening*: Fostering Mutual Learning and Diverse Competition among Learners*

Yosuke Yanase[†]

Abstract

This practical report critically evaluates the implementation of the newly introduced E3 course, *Active Listening*, taught by the author in the first semester of AY2023, and provides recommendations for its refinement. The *Active Listening* syllabus stipulates combining a bottom-up approach that promotes an analytical understanding of English phonetics with a top-down approach that utilizes contextual predictions, background information, and the nuances of speech situations. The instructor implemented the bottom-up teaching with strategies such as progressing from specific to holistic skills, incorporating the instructor's episodic knowledge, instructing pronunciation immediately after listening activities, sharing reflections, and utilizing AI and web resources. The top-down approach involved sharing YouTube sites that the instructor and students recommended, respectively. However, additional efforts are necessary to address biases in varieties of English and to improve "test-style listening skills." Instead of merely juxtaposing the two teaching approaches, the course should integrate them for students' enhanced engagement. To further elevate students' listening skills, *Active Listening* should augment listening activities based on free mutual learning and diverse competition.

[Keywords] bottom-up, top-down, mutual learning, diverse competition

1 Introduction

Today's rapid advances in AI (Artificial Intelligence) once again question the significance for human teachers and school classrooms. However, it is hard to imagine that technology will eradicate the need for human teaching, considering the shifts in the expectations surrounding MOOCs (Massive

* The current English edition is the secondary publication of the original Japanese edition, which this bulletin contains on the preceding pages. The author truthfully translated the original into English to the best of his ability.

[†] Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

Open Online Courses) since their inception in American higher education in the early 2010s. Initially, some argued that MOOCs would eliminate the need for teachers and learners to meet in physical classrooms because MOOCs delivered educational content accurately and instantly. However, it is now known that more than 90% of participants drop out without completing the course in many MOOCs (Chi, Zhang & Shi, 2023).

Kyoto University's required English Writing-Listening A/B courses employ an online system for English listening learning, known as GORILLA, for out-of-class assignments. GORILLA automatically delivers the material to students and grades their answers weekly. Although the failure rate cannot be published here, a significant number of first-year students in regular classes fail to complete GORILLA, resulting in the automatic loss of the required course credit due to the syllabus rules. The failure rate in the retake class is several times higher, and the number of students who risk graduation will likely increase. Although some may claim that "the failure is the students' problem, not the university's, because the students did not complete the assignments despite their knowledge of the passing criteria," that argument may not reflect the reality of the student's learning. Like the MOOC example above, many learners without special motivation struggle to continue learning when machines provide general explanations and encouragement. Many learners and teachers emphasized the importance of gathering in the physical space of the classroom during the period of the COVID-19 pandemic, when instruction had to be switched to online. This paper examines the educational significance of teacher and learner meeting in the classroom and engaging in mutual learning¹ and diverse competition² by reflecting on the early-stage implementation of *Active Listening*, the new E3 course at Kyoto University.

E3 courses are a group of elective subjects related to English in the common and liberal arts education of the university³. While E1 courses teach English reading and E2 courses use English as the language of instruction as EMI (English as a Medium of Instruction), E3 courses aim to improve students' English language skills. The E3 Working Group⁴ submitted its final report to the Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS) on March 23, 2021 (E3 Working Group, 2021). The report stated that the TOFEL ITP listening scores of first-year students indicated that the majority of the students did not reach the level necessary for taking classes in English abroad. It also pointed out that the online GORILLA alone was inadequate to enhance the level⁵. It further stated that the number of students taking E2 courses was still insufficient and that there was room for improvement in the listening (and speaking) skills of the students. Therefore, the report proposed a E3 course reform to improve students' listening skills so that they are better prepared for EMI courses at Kyoto University and abroad. Although the explanation of the entire reform is omitted here due to space limitation, it must be emphasized that *Active Listening* was newly established as part of this reform⁶.

Since *Active Listening* is intended to contribute to the increased participation in E2 courses, it is open to students from the second semester of their first year, unlike the other E3 courses that students can take only from their second year. Furthermore, the report indicated that *Active Listening* is part of a future major reform to reallocate resources such as faculty members in charge.

As already publicized on the website, the first-year students are required to take four compu-

sory courses to develop basic English skills, while the second-year students are required to take E1, E2, and E3 courses to enhance their English language skills. While this basis remains, we must point out that the current curriculum is not necessarily optimal. If we want students to learn successfully in E2 courses from their second year, the curriculum needs to cultivate their listening skills at an early stage. From this perspective, a critical issue is the appropriate allocation of the resources of eight credits for the four required foreign language courses (English). It is assumed that the expansion of English education in primary and secondary education will gradually improve the English proficiency of new students. In addition, language teaching methods are expected to evolve with advances in AI and other technologies. To adapt to such changes in the educational environment and achieve optimal educational effects, it is desirable to make a major reform concerning significant factors, such as the basic English skills to be taught in each semester, the students' learning time, the number of credits/courses, and the teachers in charge. (E3 Working Group, 2021, p. 7)

In response to this report, the creation of the new course *Active Listening* was approved by the university. A study group consisting of some members of the Division of English Language Education (DELE) at the International Academic Research and Resource Center (i-ARRC) produced a draft of the common part of the syllabus for this course. The draft was examined and approved by the English Committee. The common part was deemed necessary because *Active Listening* is offered in multiple classes. *Active Listening* was expected to produce the most educational effect if each instructor designed the course according to the common syllabus description while deciding on the rest individually. The common part of the syllabus is as follows:

Course Outline and Objectives:

The purpose of this course is to develop the listening skills necessary for taking lectures in English. In developing listening skills, the course combines a bottom-up approach that emphasizes listening comprehension at the word/sentence level and a top-down approach that emphasizes cognitive understanding by utilizing background knowledge and context. The course aims at students' active participation in lectures in English by improving their listening skills.

Goals:

The following three objectives are defined as goals of this course. Students are expected to acquire the following abilities by the end of the course.

- (1) Analytically understand the phonetic features of English, such as vowels, consonants, rhythm, intonation, linking, reduction, and assimilation, and apply this knowledge when listening.
- (2) Acquire and apply the listening strategies of using context, background knowledge, and the speech situation in order to predict upcoming information and modify one's prior understanding.
- (3) Comprehend introductory lectures in English (10–20 minutes) and accurately grasp the

outline and main points of the lecture.

Methods and Perspectives of Assessment:

Each instructor designs methods and perspectives of assessment, which will be reviewed by the expert members of the Career Development Committee (International Communication). In all classes, 30% of the grade is based on the final examination. The examination consists of one or two 10-minute lectures in English, and students are assessed on their comprehension of the outline and main points of the lecture(s). Each instructor can decide on the grading methods and perspectives other than the final examination, which they must stipulate in the syllabus. The validity of these methods and perspectives is also reviewed by the expert members of the Career Development Committee (International Communication).

To summarize the common part above, *Active Listening* combines bottom-up instruction through an analytical understanding of the phonetic features of English and top-down instruction through predictions based on context, background knowledge, and speech situations. In other words, *Active Listening* is not an articulatory phonetics course although it teaches the application of articulatory phonological knowledge to listening. At the same time, it is not a course that only deliver extensive listening materials without analytical instruction, as if saying, “Listening skills will naturally improve as you listen.”

At the start of *Active Listening*, only one class was offered in the second semester of FY2022 and the first and second semesters of FY2023 as the trial implementation⁷. After sharing the findings of this trial implementation, *Active Listening* will be fully implemented in multiple classes (5 classes) in AY2024. This paper, written immediately after the first semester of AY2023, is intended to share findings and insights from the trial implementation⁸. In addition, this paper is also intended to be read by policymakers on English language education for a better understanding of classroom practices.

In the following sections, the author reports and discusses his *Active Listening* teaching in the first semester of AY2023. It appears that this course seems to have generated a reasonable degree of satisfaction with both bottom-up and top-down instruction⁹, considering the students’ weekly reports and their facial expressions in class. However, judging from the answer sheets in the final examination (note-taking and English summaries of new English mini-lectures), the notetaking and summarizing of the content that was out of students’ personal interest was not as successful as was inferred from the daily bottom-up and top-down assignments. In other words, although the author “combined” bottom-up and top-down instruction, he may not have fully “integrated” the two.

In the process of this reflection, the author conceived a practical hypothesis: To further improve listening skills by integrating bottom-up and top-down instruction, it may be critical to challenge students with common top-down listening tasks; students should experience mutual learning and diverse competition in response to that challenge. In the following, the author reports on his *Active Listening* teaching and explains the reasons for proposing this practical hypothesis.

Active Listening in the first semester of Academic Year 2023 had to be exploratory because the author was instructing the course for the first time. After establishing the basic principles of

the course, the author sought ways to enhance the learners' learning through trial and error¹⁰. This practice did not involve measuring predetermined indices at the beginning and end of the semester to demonstrate the effectiveness of the classes. Therefore, the description of this paper must be qualitative.

To avoid descriptions that are arbitrary and one-sided, the author describes his mixed feelings, often contradictory ones, in the following sections. Hence, this paper includes what Bruner, a renowned scholar on cultural psychology, termed as the “narrative mode” (Bruner, 1986; Yanase, 2018). Although the structure of the following sections adheres to the “paradigmatic mode” for readability, the author occasionally uses the narrative mode to express his thoughts and produces discussions with no definite conclusion. The author also reproduces colloquial expressions in direct speech to convey the atmosphere of the classroom. The author hopes that this paper will serve as a case study that showcases the thinking process of a practitioner by presenting his emotions and value conflicts in a narrative style, which are difficult to depict in the paradigmatic mode.

2 Practice and reflection on bottom-up instruction

The characteristics of the author's bottom-up instruction can be summarized in five points: “from detailed skill acquisition to general skill acquisition,” “insertion of instructors' episodic knowledge,” “pronunciation instruction immediately after listening,” “shared reflection,” and “sharing AI and web resources” These points are explained below.

2.1 From detailed skill acquisition to holistic skill acquisition

The author adopted the *Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation* (Fukazawa, 2015) as the textbook. This book, along with many example sentences with sound sources, probably provides one of the most systematic and comprehensive explanations of the English phonetic features among books for the general public in Japan. The chapter structure of this instructional guide to English pronunciation is shown on the left side of Table 1 below. It begins with the holistic skills of rhythm and intonation, moves on to more specific skills, such as consonant clusters, and finally explains individual vowels and consonants.

This instructional order from the overall features to the details is often observed, for example, when teaching singing to young children. Teachers first introduce the melody (intonation) while emphasizing hand clapping (rhythm), prompting children to sing along. They do not introduce musical terms such as staccato and legato from the beginning. Accurate articulation of the lyrics is not required at the beginning, either.

However, the author uses this book primarily for teaching listening to university students. In addition, the book is used for a bottom-up instruction. The author hoped that the students will feel a sense of improvement in listening after learning the details of sounds that were previously unknown. For this reason, the order of instruction was altered: (1) phonetic symbols; (2) assimilation, in which phonemes change markedly; (3) reduction, in which phonemes disappear; (4) linking, in which phonemes are connected; and (5) rhythm and intonation. The author's course starts with the

Table 1. The Order of the Phonetic Features in the *Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation* and the Author's Course

	<i>The Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation</i>	The author's course
1	Rhythm (Chapter 1)	Vowels (Chapter 9)
2	Intonation (Chapter 2)	Consonants (Chapter 9)
3	Linking (Chapter 3)	Assimilation (Chapter 4)
4	Assimilation (Chapter 4)	Reduction and Consonant Cluster (Chapters 7 and 8)
5	Contraction (Chapter 5)	Contraction and Explosion (Chapters 5 and 6)
6	Explosion (Chapter 6)	Linking (Chapter 3) Part 1
7	Reduction (Chapter 7)	Linking (Chapter 3) Part 2
8	Consonant Cluster (Chapter 8)	Rhythm (Chapter 1)
9	Vowel and Consonant (Chapter 9)	Intonation (Chapter 2) Part 1
10		Intonation (Chapter 2) Part 2 ¹¹

pronunciation of vowels and consonants, which are listed at the end of the *Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation*. The instruction on vowels and consonants is located at the beginning of the course so that subsequent learning will be based on theoretical knowledge rather than students' intuitive perception. When teaching assimilation, reduction, and linking, the author analyzes the phonetical challenges for Japanese speakers. In addition, the students are asked to reproduce the sounds to embody the phonetic knowledge. As a result, by the time the learners learn rhythm and intonation in sentences, they are expected to pronounce the component phonemes. The order of presentation in the author's course is shown on the right side of Table 1.

However, the order of (1) vowels and consonants; (2) assimilation; (3) reduction; (4) linking; (5) rhythm and intonation was established after the reflection on the first semester. The first semester of AY2023 did not establish the order from (2) assimilation to (3) reduction and (4) linking or from "the marked phoneme changes to the disappearance of phonemes and the continuity of phonemes." In that semester, students learned linking in Chapter 3 after learning vowels and consonants. The course followed the chapter order of the textbook, except that the last part (vowels and consonants) and the first part (rhythm and intonation) were swapped. However, linking was very challenging for students, who had developed their English language skills primarily by reading. The students struggled to recognize connected sounds because the sounds had no acoustic pauses that corresponded to the essential visual spaces in reading. Many students found the oral reproduction of the connected speech challenging, which contained numerous phonemes in one sequence. Therefore, the author had to extend the linking lesson to two weeks, deviating from the original schedule. On the other hand, once the study of the connected speech was over, the listening and oral reproduction of assimilations was easy for students because sound changes were conspicuous¹². The reduction features that followed were also not demanding in listening and oral reproduction.

In other words, the bottom-up instruction in the first semester of AY2023 inadequately presented the material in a "difficult to easy" order in listening. As the author learned the material's difficulty level for students from their responses, he realized that a better order for students was from (2) to

(3) and (4), that is, from “conspicuous to subtle changes.” Students should first learn assimilation and then reduction after receiving the initial instruction of vowels and consonants. Then, by the time the course reaches the linking issues, the students most likely would find the connected speech not so challenging. It is critical to set the difficulty level appropriately because inadequate order of presentation demotivate some students. The author intends to use this new sequence as a basis for future instruction, although it is subject to potential readjustment later from further observation and reflection.

2.2 Insertion of Episodic Knowledge of the Instructor

With a wealth of example sentences with sample audio in the *Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation*, the author continuously asked students to dictate and reproduce the audio. He spent more time on listening and pronunciation practice than lecturing, leaving the explanations to the textbook and PowerPoint slides as much as possible.

However, instructors should note that continuous practice can become monotonous and decrease the learners’ concentration level. To avoid this, the author briefly inserted the know-how he had learned when it was appropriate. For example, “Pay attention to the part, ‘Can I.’ How is it pronounced?” “The next sentence is a formulaic expression in everyday conversation. Remember it with its intonation.” “The /z/ sound is hard to hear, isn’t it? When Japanese speakers say “Hanshin Tigers,” the final consonant is often /s/, not /z/. Japanese speakers often fail to hear the /z/ sound at the end of a word.” Hopefully, these specific episodes prevented high-speed drills from becoming mechanical.

2.3 Pronunciation instruction immediately after listening

Following the general principle that one’s perception of a movement improves when one performs it by oneself, the author added pronunciation practice to the listening tasks. However, in Japan, English pronunciation is often misrepresented as a highly symbolic act of indicating the speaker’s intelligence and cultural sophistication. This may be due to the collective accumulation of mixed feelings toward the U.S. since the arrival of the Black Ships toward the end of the Edo era and the Occupation Forces after WWII. Japanese learners of English often feel embarrassed when their pronunciation significantly deviates from American English pronunciation. Conversely, those Japanese learners with native-like English pronunciation due to their special circumstances often cease to speak that way to avoid provoking other learners psychologically. Some Japanese teachers of English are obsessed with policing Japanese English pronunciation that deviates from that of the “natives,” the colloquial term for “native speakers of English,” whatever that means. The author will discuss varieties of English around the world later. Under these circumstances, the author tried to ensure that pronunciation exercises would not complicate learners’ mixed feelings.

Specifically, the author avoided asking an individual student to demonstrate their pronunciation in front of the entire class. Students reproduced the pronunciation alone or with their partner in a pair¹³. During class, the author occasionally talked like below to prevent students from being entangled in complex feelings.

“It is impossible for us foreigners to speak English perfectly like native speakers. To take a similar example, even if I speak the Kansai dialect, people born in the Kansai region will soon notice that it is not authentic. If differences within one language can be detected easily, differences across languages should be more obvious. So, a pronunciation that is ‘comfortably intelligible’ is sufficient for users of English as a foreign language. Content matters much more than sound. However, for now, we use the current audio as a working model for pronunciation.”

Similarly, when the author pronounced challenging phonemes for him to articulate precisely, he acknowledged his weaknesses and encouraged students to compare his pronunciation with the model. Simultaneously, the author occasionally demonstrated his English fluency during class to gain recognition as an advanced user of English. These two aspects made a delicate balance between humility as a lifelong English learner and confidence as an English user. The author wanted his students to acknowledge him as a non-native English-speaking instructor with sufficient English skills and, simultaneously, with a humble awareness of the limit of his competency¹⁴. In any case, English pronunciation practice tends to be delicate when so many students and teachers are entangled in such mixed feelings.

However, in their oral presentations at the end of the semester¹⁵, the students spoke to their own degree of “nativelikeness” or “Japaneseness.” While no students perfectly embodied the phonetic characteristics of the textbook’s American English, all were adequate in their rhythm and intonation with which they conveyed the points of their messages. Although most students remarked something like, “I had butterflies in my stomach when I stood up in the front,” their performances were laudable as public speakers. Given the gap between the author’s mixed feelings and the student’s remarkable performance, one might suspect that the author was too overwhelmed by his complicated feelings (This may be due to his career that demands him to act like an “expert” of English rather than an ordinary user of English). Perhaps the author could liberate himself from his concerns and ask individual students to demonstrate their pronunciation in class. The accumulation of such experience may lead to the social recognition of the genre of “Japanese English,” a concept that has been discussed for many years without resulting in social acceptance. Unlike “Indian English” and “Singaporean English” as legitimate varieties of English, “Japanese English” is often a pejorative term without proper recognition, although it may be due to the difference between English as a second language and English as a foreign language. The author wishes that his further exploration in pronunciation instruction would enhance his professional skills.

2.4 Sharing Reflections

Whenever students had trouble in the phonetic features of English, the author asked them to work in pairs to check each other’s understanding and analyze the cause of the difficulty. During the analysis, the students accessed the PowerPoint slides in front and the textbook at hand, which they had been briefed on. In other words, immediately after a mini-lecture, students had the opportunity to assess their understanding. By knowing each other’s listening difficulties in pairs, students were reassured that they were not alone in struggling in sound recognition. At the same time, each

gained different insights from their partner. Additionally, students inspired each other to learn further. Mutual learning and diversified competition seemed to be one of the most significant aspects of classroom learning.

As the author walked around the classroom for observing students, he noticed the relaxed yet eager atmosphere in which the students shared their understanding in pair learning. After the author monitored the content and tone of comments in each pair, he stopped the pair activity at an appropriate time and shared findings with the entire class. Yet, with his inevitable limit of observation capacity, the author frequently asked in a casual tone, “Anyone who wants more time? Raise your hand, please.” unless the time was running short. By asking for a show of hands and never ignoring them, the author respected the learners’ autonomy as much as possible¹⁶.

The author does not use a kitchen timer or similar device to precisely measure the activity time because he cherishes the comfortable atmosphere of the classroom. In his extensive comparison of various psychotherapies, Kandabashi (1990, 1994), a renowned psychiatrist for his clinical skills, concluded that the most critical factor was the “atmosphere” that each therapy created. (Hayashi and Kashima, 2012, Kuroki and Kashima, 2013, Yanase, 2019) Despite the differences between psychiatry and language education, the author, as a practitioner, concurs with Kandabashi’s view. The author makes it one of his essential tasks in class to observe learners in the following priority: “involuntary movements” (such as uncontrollable changes in facial expression) > “voluntary movements” (such as gestures and speech tone) > “speech content” (verbalized message.) If the top priority for teachers is the exact and efficient completion of the lesson according to plan, they should probably prepare the following activity at the teacher’s desk without observing pair discussions; they should not mind the slightly irritating alarm sound to stop students’ engagement. An impersonal approach like this, however, does not enhance teachers’ observation skills, suppressing the contingent and personal interaction between teacher and learner (Yanase, 2022, 2023a). Hence, the author adopts the criterion of “atmosphere,” albeit unidentifiable objectively by a third party, for the timing of the end of an activity.

2.5 Sharing AI and Web Resources

Unlike novice learners, intermediate and advanced learners of English need to be exposed to a wide variety of English. To assemble diverse model sounds, the author utilized AI and web resources extensively. Many Japanese learners of English fail in listening comprehension due to individual differences in English pronunciation. Listening materials for the intermediate level and above should present numerous examples in multiple voices. However, most textbooks on the market present only a few examples in one type of voice. The author decided to use AI to provide students with a wide variety of example sentences and voices in learning materials.

Among numerous text-to-speech AIs, the author selected an application with a limited number of basic functions¹⁷, which he found user-friendly. The author subscribed to a premium version at his expense¹⁸ to publish the sound source that the AI created. This AI had US, UK, Australian, and Indian English for English variants. The author fixed on U.S. English to accord with the *Comprehensive Learning Dictionary of English Pronunciation*¹⁹—the issues related to varieties of English will be discussed later. Since the application provided about 40 different voices within U.S. English, the au-

thor changed voices for each example sentence to familiarize the learner with individual differences within the standard U.S. pronunciation.

After voices were selected in this manner, the author had the next task of preparing many words and sentences as examples. The author admires a particular former junior high school English teacher who can instantly present numerous minimal pairs (e.g., “bug” and “bag”), in which one phoneme changes the word meaning. He achieves this feat because of his continuous pronunciation instruction. However, the author lacked that much experience and needed to find many minimal pairs to teach vowels and consonants effectively. The author found it challenging to immediately recall many words containing a particular phoneme, let alone minimal pairs. Obviously, minimal pairs for particular phonemes must have these phonemes in a conspicuous position without containing other confusing phonemes. Thus, it was time-consuming to find a large number of words and minimal pairs suitable for exemplifying particular phonemes.

ChatGPT dramatically reduced the time for collecting such examples. The author explored the potential of ChatGPT for English language teaching during the first few months after its debut²⁰ despite his lack of programming experience in Python or C++, for example. ChatGPT produced minimal pairs and example words in a much shorter time than the time the author’s web search or his own recall would have taken. Apparently, ChatGPT’s output was not always perfect, containing irrelevant items occasionally. However, removing unsuitable examples was much easier than inventing new ones from scratch. Thus, assisted by AI, the author created teaching materials for vowels and consonants in about a week. If the author had prepared the minimal pairs and example words by himself and then asked native English speakers to record the pronunciation, it would have taken several months. AI has significantly shortened the time to create numerous examples for many study items in multiple voices.

The author also encouraged students to use AI applications. In particular, he recommended installing Language Reactor²¹ and Hayaemon²² for bottom-up listening. These applications enhance user experience on the computer in learning English listening.

In addition to the use of AI, the author also recommended the use of web resources (YouTube videos that are publicly available). Because English teaching has a global market, numerous YouTubers speak in English, the largest common language among English learners, and provide remarkably high-quality instructional videos for free. However, since the YouTube platform prioritizes recommending popular videos, it does not necessarily list videos pedagogically. Therefore, the author selected several YouTubers who provide useful and trustworthy videos and published blog articles that listed their videos in line with students’ learning needs. These pages are listed in the Appendix.

For the future task, a systematic table of the learning points in bottom-up instruction is necessary for a quick review. It is not sufficient for students to be presented with learning items in the following sequence: (1) vowels and consonants; (2) assimilation; (3) reduction; (4) linking; (5) rhythm and intonation. The summary table would enhance students’ self-assessment of their learning. The author regrets that such a table is unavailable at this stage.

3 Practice and reflection on top-down instruction

The author’s practice of top-down listening instruction, in which students listen through while guessing the meaning of some incomprehensible details, can be summarized in the following four points: sharing “teacher recommendation sites” and “student recommendation sites,” and the areas for improvement on “English variant bias” and “test-style listening.” The sections below report the author’s top-down listening instruction in these regards.

3.1 Teacher Recommendation Site

The top-down instruction in the first semester of AY2023 started from introducing English video sites of the author’s recommendation. He encouraged students to select their favorite videos from them and summarize their learning in the portfolio as homework. Below is the list of teacher-recom-

Table 2. Teacher-recommended sites for top-down listening in the order of presentation

	Category	Site Name	URL
1	Introductory	VOA Intermediate	https://learningenglish.voanews.com/p/5610.html
		News in Levels	https://www.newsinlevels.com/
2	Review	Khan Academy	https://www.youtube.com/c/khanacademy
3	Educational (general)	TED-Ed	https://www.youtube.com/@TEDEd
		Kurzgesagt	https://www.youtube.com/@kurzgesagt/featured
4	Educational (humanities or science)	5 Minutes	https://www.youtube.com/@5minutes762/featured
		Knowledgia	https://www.youtube.com/@Knowledgia
		Mind Your Decisions	https://www.youtube.com/@MindYourDecisions
		3Blue1Brown	https://www.youtube.com/c/3blue1brown/featured
5	University/OCW	YouTube channels of the top 10 universities in the world	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/10youtube.html
6	Science (advanced)	Science Podcast	https://www.science.org/podcasts
		Nature Podcast	https://www.nature.com/nature/podcasts
7	Varieties of English 1 (English as a first language)	English in countries other than the U.S. where English is the native language of many citizens	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/1.html
8	Varieties of English 2 (English as a second language)	English in countries that use English as one of their major languages due to colonial influence	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/2.html
9	Practical application 1: Standup comedian from the Global South	Learn from Trevor Noah and other standup comedians for their inventive intelligence and deft storytelling	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/trevor-noah.html
10	Practical application 2: Movies	Learn American English pronunciation through movies (Rachel’s English)	https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/rachels-english.html

mended sites, although it is not the actual list used in the first semester of AY2023, as was the case with the phonetic features of English. The list represents what the author currently considers suitable after his reflection on that semester's practice.

The introductory sites in #1 are for students who struggle with English listening. The English speed on these sites is annoyingly slow for native-level English users. However, some students need to start at this speed level and gradually build confidence. Simultaneously, the instructor recommends that students with advanced skills should listen to other sites, such as TED.

Khan Academy at #2 explains educational content up to high school levels in the U.S. across a wide range of fields. It includes math/arithmetic, science, arts, humanities, social sciences, and computer science. This site is listed second because much of its content has been previously learned by the students in this course.

Sites in #3 and #4 enlighten learners at more advanced levels. #3 elucidate academic findings in 10 minutes or less. It follows #2 since some of the content may be new to students. #4 focuses more on either history or science than #3 does. History was chosen among humanities because historical knowledge is essential for trust building in cross-cultural communication. Those Japanese speakers of English who know historically significant persons, places, and events only in the Japanese *katakana* pronunciation appear ignorant to English speakers in conversation. Therefore, the author prioritized history in humanities. The author wishes science students also see history videos. However, for those students who want to focus on science-related issues, he selected sites on more advanced topics in mathematics and science.

#5 is a blog post that the author created to increase students' interests in studying abroad. It is linked to the selected pages from the websites of the top 10 universities in the Times Higher Education's World University Rankings 2023²³. The linked pages range from a brief description of the undergraduate and graduate programs to Open Courseware (OCW) pages. This blog article promotes students' access to top universities' pages according to their individual interests, motivations, and abilities. It also aims to familiarize them with the English spoken at overseas universities.

#6 challenges students to comprehend podcasts that some leading natural science journals present. As many of those episodes provide transcripts, students with sufficient scientific knowledge can enjoy the content. Simultaneously, the author suggested that students opt for other sites if they find these podcasts too demanding.

#7 and #8 intend to address the bias of the course materials toward American English, one of the most critical issues that the author identified in reflection. More will be discussed in 3.3 below.

#9 and #10 require students to apply their listening skills to practical listening other than academic lectures. These two raise communication issues that students may eventually encounter in real-world situations. English-speaking standup comedians in #9, distinct from the Japanese counterparts, often address controversial political and social issues, particularly racial ones. The standup comedians selected in #9 transform highly sensitive issues into laughter with their unique analysis. Their analytical interpretation may derive from their Global South background. They point out the absurdity of assumptions in the English-speaking sphere with their distinct accent that differs from American and British English. When Japanese people use English in English-speaking coun-

tries, they are most likely regarded as non-Western speakers because of their pronunciation and thought patterns. The author presumed that these standup comedians could serve as role models for Japanese English speakers in that they intellectually relativize the common sense of the English-speaking sphere with their “foreign accent” in unapologetic manners.

In fact, the brief standup comedy the author showed in class caught so much attention from the students that many of them watched the same video and others at home and posted their comments in their portfolios. However, one student remarked on the video shown in the class that he failed to understand the punchline at the end although he followed the entire storyline. It reminded the author that many students have not sufficiently developed a sense of intonation. When intonation was covered in the final phase of bottom-up instruction, many students regarded it only as a physical change in pitch, not realizing the subtle nuances it produces. Even after they understood the nuances through examples and explanations the author provided, acoustic reproduction remained challenging for most of them. As a doctoral graduate student in physics in the Kyoto University Autonomous English User Interviews noted (Yasudome, 2022), even natural scientists in dialogue communicate feelings, mostly conveyed through intonation, when they exchange information and knowledge. Understanding and expressing subtle differences in intonation is vital for foreign speakers of academic English. In this respect, the author believes that standup comedies and films can become valuable teaching materials in *Active Listening*, as intonation particularly plays a significant role in these genres.

#10 posts a list of YouTube videos for learning American English pronunciation from movies. The acoustic analysis of these YouTube videos is extensive, serving as a comprehensive review of the bottom-up learning about the phonetic features of English in prior lessons. Japanese speakers of English may encounter less formal English in the corridor outside a presentation room. These videos also encourage learners to use the movies as a medium to learn English in a relaxed manner. One student shared his excitement with the author when he reported on watching a sequel of his favorite movie, *Top Gun: Maverick*. With flushed cheeks, he explained his excitement of directly understanding the utterances in the film, including the implications produced by the tone of voice, rather than through subtitles. Sharing minute emotions is crucial even for researchers to build deep trust. Materials in #9 and #10 should benefit *Active Listening*, which aims at the development of academic English proficiency in the real world.

3.2 Student Recommendation Site

The weekly assignment asked students to compile a portfolio of their learning outcomes of watching either the teacher-recommended site above or an English video site of their choice²⁴. The author’s respect for students’ choices was enhanced by an undergraduate student in the autonomous English user interview series at Kyoto University above (Tateyama, 2022). In the interview, she remarked that she frequently watched YouTube and other sites for enjoyment. Listening for pleasure was more beneficial for her continuous learning of English than self-imposed listening for complete understanding. She stated that the demand for complete understanding distanced many Japanese away from English. Yet, many English instructors provide comprehension quizzes immediately after

listening. Perfectionism in listening comprehension may undermine the potential for lifelong enjoyment of using English. Her comment redressed the author's bias as an English instructor, and he decided to encourage students to choose English videos freely.

While hard-working students chose both teacher-recommended videos and their own favorites, less dedicated students only watched the videos of their choice. Yet, their reports broadened the intellectual horizons of the class. In fact, some videos in Table 2 were introduced by students. Videos students recommended included a jazz drummer's explanation of his technique, a famous Japanese YouTuber's episode on his English learning, an English interview with a non-Japanese who developed his Japanese proficiency immensely, innovative uses of ChatGPT, other standup comedians than those introduced in class, linguistic accents from around the US, legendary public speeches by Steve Jobs and others, and academic lectures in English by the mentor of a student's professor. The portfolios indicated that the students experienced a culture of enjoying English-language videos. However, their listening skills in the test format were not as high as the author expected. This concern is discussed in section 3.4.

3.3 Area for improvement 1: Bias toward American English

As described in 2.5, the author presented various example sentences in multiple voices. Simultaneously, he limited the English variants to American English to avoid increasing the listening difficulty for the students. The superficial reason for choosing American English was that the textbook employed that variety. However, a more significant background factor was that the author was influenced by the bias in Japan to regard American culture as the global standard.

The exclusive selection of American English as the norm among varieties of English distorts the learner's perception of reality. Kyoto University students take TOEFL-ITP tests twice during their first year at the university's expense, in which their listening ability is measured by the American English standard alone. However, if practical English users in Asia, for example, take TOEFL examinations, their listening scores might be unexpectedly low. The low scores do not necessarily mean their insufficient listening skills in the workplace; the contemporary world that has been extensively globalized has become pluralistic, not unitary. Admittedly, American English is often adopted as the teaching material in schools for a variety of reasons. However, when American English is exclusively used in large-scale standardized tests that are supposed to measure general English proficiency, the school education system could be criticized for advancing the hegemonic status of American English.

The author was also aware of the issue of American English bias. In the first semester of AY2023, he deliberately introduced a video that criticized colonialism by a standup comedian from the Global South. One could argue that the introduction of English variants may have been adequate in the author's course because the author furthermore introduced other standup comedians with English variants other than American English. However, a short introduction would not be sufficient to reconsider American English hegemony, which has become so ordinary that many have lost their critical awareness.

With the rise of the Global South in recent world history, English instructors' thoughtful choice of English variants in teaching materials can decrease prejudice concerning English accents. The fol-

lowing semester will use two weeks for varieties of English. One week will focus on English variants in countries where English is the first language (mother tongue) of the majority of the population, such as the UK and Australia. The other week will cover English variants in countries, such as the former British colonies, where English is regularly used as a second language.

3.4 Area for improvement 2: Test-style listening

At the semester's final examination, students were requested to listen to short lectures in English, as the common part of the syllabus demanded. To ensure fairness among the students, the content of the lectures had to be in areas that none of the students had previously reported in their portfolios. The final examination asked students to "summarize the lecture in English after taking notes on the outline," according to the syllabus. This meant that, unlike the weekly assignments, the students were presented with topics independent of their interests and asked to summarize it in a general manner rather than from their perspectives. This was artificial test-style listening, as opposed to natural listening, which is based on one's own interests and knowledge. The final examination differed from the students' daily learning activities in that they could not 1) visually supplement acoustic input on Language Reactor, 2) rewind videos repeatedly when necessary, or 3) use AI to assist summary writing. Perhaps because of these differences, the test outcomes were lower than the author's expectation based on the students' performances in the classes.

To summarize, the top-down instruction in the first semester of AY2023 was successful in that it provided students with the experience of satisfying their intellectual curiosity in English by sharing teacher recommendation sites and student recommendation sites. However, the English variant bias and the listening comprehension in the test format needed improvement. Since the issue of English varieties has already been addressed, the following section will cover the improvement in test-style listening. It also addresses the significance of face-to-face contact between teachers and learners in the classroom, as mentioned at the beginning of this paper.

4 Significance of mutual learning and diverse competition on the same task in top-down instruction

The author is critical of the English teaching that is driven by large-scale standardized test preparation (Yanase, 2023c). Nonetheless, he feels the need to support students who face the challenge of increasing test scores. A desirable long-term study habit (i.e., to enjoy academic English listening) may crash if the instruction fails to address their short-term desires (i.e., to improve test scores). *Active Listening* is expected to prepare for test-format listening tasks in which English sound sources are presented irrespective of the listener's interest or knowledge to test the listener's "general" comprehension. The following explains the author's policy for dealing with this issue.

As previously mentioned, the author currently believes that students should share the same sound source and be encouraged to learn mutually and compete diversely in top-down instruction in integration of the outcomes from bottom-up instruction.

In the bottom-up instruction, as described in 2.4, the mutual learning and diverse competition

Table 3. The current lesson plan of *Active Listening*

week	Bottom-up instruction	Top-down instruction
1	Introduction: Explanation of course objectives, classroom culture, and digital environment	
2	Vowels (Chapter 9)	Introductory: VOA, News in Levels
3	Consonants (Chapter 9)	Review: Khan Academy
4	Assimilation (Chapter 4)	Educational 1: TED-Ed, Kurzgesagt
5	Reduction and consonant cluster (Chapters 7 and 8)	Educational 2: 5 Minutes, Knowledgeia, Mind Your Decisions, 3Blue1Brown
6	Contraction and explosion (Chapters 5 and 6)	Academic English 1: YouTube channels of the top 10 universities
7	Linking (Chapter 3) Part 1	Academic English 2: Science, Nature
8	Linking (Chapter 3) Part 2	Varieties of English1: English as a first language
9	Rhythm (Chapter 1)	Varieties of English 2: English as a second language
10	Intonation 1 (Chapter 2)	Practical application 1: Stand-up comedians from the Global South
11	Intonation 2 (Chapter 2)	Practical application 2: Learning American English pronunciation through movies
12	Note-taking practice 1: Abbreviation	
13	Note-taking practice 2: Segmented note-taking	
14	Note-taking Practice 3: Note editing and summary writing	
15	Final examination	
16	Feedback week	

promoted participants to advise in a relaxed atmosphere and inspire each other. Mutual learning and diverse competition are effective for personalized learning (Yanase, 2023a). They can also be linked to Kyoto University's educational philosophy of "encouraging autonomous learning through dialogue." However, in the past top-down instruction, the author prioritized fostering individual interests and motivations. The class shared only some parts of each student's portfolio and did not request students to listen to the same audio sources in the top-down manner. The final test's listening performance, lower than the author's expectation, induced a change in the author's policy. He decided that the class activities should also include test-format listening activities and encourage students to learn mutually and compete diversely in their understanding of the material.

In another E3 course *Test-taking* in AY2022, the author implemented mutual learning and diverse competition in listening to the same material. This course was abruptly assigned to the author from the second week of the new semester due to various circumstances. The author had to use the textbook designated by the previous instructor. The listening tasks in the textbook were aimed at the level of international students at U.S. universities, which most students found quite challenging. The author adopted his trusted method of mutual learning and diverse competition. At that time, the author's knowledge about the phonetic features of English was not as organized as it is now; he was unable to provide as much specific guidance during class as he did in *Active Listening*. However, the classroom culture of identifying difficulties in pairs and sharing them with the class helped to alleviate learners' lack of confidence in listening, and they learned listening tips from each other. The response to the end-term questionnaire "I felt this class was meaningful to me" was 3.79 on a 4-point

scale²⁵, although the score was about the entire course, not limited to listening activities. More meaningful to the author, the students' facial expressions and the overall class atmosphere suggested the success of the class.

Active Listening in the first semester of AY2023 prioritized the promotion of students' voluntary video-viewing, leaving the integration of bottom-up and top-down instruction to the speech presentation at the end of the semester. While the speech presentation was more successful than expected, the listening task performances in the final examination were not as successful, as mentioned above. The author plans to replace the speech activities with test-style listening tasks accompanied by mutual learning and diverse competition. Hopefully, the quality of the learning in these tasks will be high because of the knowledge students learned about the phonetic features of English. In addition, students should learn more effectively if the note-taking instruction is expanded. The current lesson plan based on the policy explained above can be summarized in Table 3 below.

The underlying theme of this paper was to examine the pedagogical need for learners and teachers to share the same physical space of the classroom. If face-to-face classes do not fulfill the factors missing in online classes, they may soon return to the boring routine before the pandemic lockdown. The missing factors in online teaching can be summarized as the learners' physical self-expression, the teacher's observation of students' responses, and the relationship development between teacher and learner (Yanase, 2022). These losses hinder "teaching as communication," in which the teacher flexibly modifies the lesson in response to learners' various reactions, including unexpected ones. Face-to-face classes will lose much meaning if learners cannot express themselves with facial expressions, gestures, and tone of voice without feeling anxious. Likewise, teachers need to sensitively detect changes in students and accordingly modify their lessons; they should associate the learning content with students' interests. Only when these are achieved will the gathering of multiple persons in the classroom be meaningful.

In the bottom-up instruction of the author's *Active Listening* in the first semester of AY2023, participants reasonably expressed their natural emotions that accompany learning, to which the author responded. Participants engaged in pair discussion in a relaxed manner, and the author shared the discussion outcomes, adding relevant explanations. However, the top-down instruction did not include test-style listening activities because it prioritized students' individual interests.

Nevertheless, many students must take large-scale standardized tests, in which the listening comprehension section successively offers a variety of topics irrespective of their interests. Furthermore, questions are asked from the test creator's perspective, not from the test taker's. In contrast, in real-world listening, one listens and summarizes content out of their knowledge and interests in their familiar context. Test-style listening, in other words, is a particular artificial language game²⁶. Yet, many undergraduate and graduate students are forced to be engaged in this unnatural language game due to the prevalence of large-scale standardized tests. In the long term, the power concentration in a particular variety of English in large-scale standardized tests needs to be examined critically (Yanase, 2023c). In the short term, however, university English instructors feel obliged to assist students with test-format listening.

Collaborative learning, in which students learn from each other, is probably one of the best

methods to provide personalized interaction in such test preparation. Collaborative learning differs from cooperative learning in that the learners choose their own tasks and learning methods by themselves²⁷. The enhanced freedom and responsibility in collaborative learning advances learner autonomy. When multiple autonomous learners work on the same task, competition arises spontaneously. This competition takes place in a free and creative context and is not a one-size-fits-all competition with uniform conditions. Learners are not ordered for their outcomes in a straight line from first to last or from 100 to 0. Each learner has different strengths and weaknesses. In their collaboration to accomplish a task that could not be completed alone, learners appreciate the strengths of others and realize their own weaknesses. This awareness often leads to a desire to emulate others for their strong point. Free mutual learning is probably the joy of human beings as social beings, while diverse competition may be a holdover from the survival instincts of animals. Mutual learning and diverse competition lead to each participant's awareness of their individual features. In this respect, mutual learning and diverse competition represent very human-like behaviors. With this kind of learning, it makes sense for multiple persons to gather in the same classroom even at the expense of commuting. While *Active Listening* requires specific teaching techniques as a listening instruction class, it should continue to develop the fundamental human activities of free mutual learning and diverse competition²⁸.

Notes

- 1 The term “mutual learning” (学び合い) here refers to collaborative learning in a broad sense of the term, indicating that learners working on a task discuss and help each other according to their needs and desires. Yanase (2020) reported on the practice of an English writing course inspired by Nishikawa's (2016) theory and method of “mutual learning” and summarized some aspects of this teaching method. The current report is a sequel to that report (Yanase, 2020). In that report, the term “mutual learning” was used with double quotation marks, as was recommended in Nishikawa (2016) to indicate its unique features. However, the current report does not follow that convention because it uses the term only as one instance of collaborative learning.
- 2 The word “competition” is expressed as “競い合い” in the Japanese edition with the adjective “diverse” added. Although “競争” is prevalent in Japan as the translation of “competition” by Yukichi Fukuzawa, the author has some reservations over the negative connotation of the character “争” in it. According to *Fukuo Jiden* (The Autobiography of Yukichi Fukuzawa), Fukuzawa regarded the concern over the character of “争” as an example of the backwardness of the Tokugawa era. Nonetheless, the author shares the concerns held before the “civilization and enlightenment” time. By employing the term “競い合い” with no “争,” the author wishes to emphasize that learners' engagement should be a diversified one based on students' individual features, not a standardized race.
- 3 Even though E3 courses are designed to develop English language skills, they belong to the Career Development Course category, not the Foreign Language Course category in the curriculum. The number of students taking E3 courses has been stagnant because most faculties do not demand many career development courses as the graduation requirement. This issue will not be discussed further in this report due to space limit.
- 4 The E3 Working Group was reorganized in AY2020 from the E2/E3 Working Group established in AY 2019.
- 5 The report also pointed out that speaking instruction was lacking in the university's required English

courses. However, the absence of speaking courses is not discussed further in this report.

- 6 *Active Listening* was named *Basic Listening* in the report.
- 7 The trial implementation period was initially planned to last only one year. However, a timetable manager of the English Program claimed that it would be extremely difficult to secure instructors, full-time or part-time, if the number of classes increased from one to five in the middle of the academic year. In response to this assertion, the English Committee agreed to extend the implementation period to one and a half years.
- 8 The lecturer in charge of *Active Listening* for the second semester of FY2022 was Ms. Aya Yoshida, who left the university at the end of AY2022. The author has been teaching this course since the first semester of AY 2023 and wrote this report. The author received an oral briefing and written records from Ms. Yoshida and utilized that knowledge when teaching the course and writing this paper. The author would like to express his gratitude to Ms. Yoshida. Nevertheless, any defects in this report are the sole responsibility of the author.
- 9 At the time of the first draft writing, the results of the class survey that ILAS administered were not disclosed to instructors. However, at the time of the first draft review, the results became available (10 responses from the 12 students who passed the course in the author's case). To Question 8, "Overall, I am satisfied with this course," six students "agreed," three "somewhat agreed," and one "somewhat disagreed." Free descriptions (originally written in Japanese) were obtained from four students: "I enjoyed the class because the assignments were designed to encourage independent study;" "This course was exceptional because students could actually practice pronunciation, and I thought it was very effective for learning English;" "The teacher was very sincere to the students and sometimes gave me advice, which I had never experienced in university classes;" and "I am also glad that we were able to learn how to use AI in language learning. In addition, we acquired a kind of 'learning strategies' beyond English learning. For these reasons, I personally feel that many students should attend this course. In reality, the number of participants was small, probably because it was a first-period lecture in the morning. I believe that it would be good to share this kind of feedback from the students on KULASIS or other media."
- 10 However, the author is very skeptical of rigid implementation of the initial lesson plans because he believes that the practitioner's competence lies in the adaptive measures to unexpected situations in the field (Schön, 1991). Although comparative experimental research necessitates the rigorous execution of plans down to the smallest detail, such execution in an educational setting ignores the realities of learners (Yanase, 2017). It is the practitioner's essential competence to respond to unexpected events, such as learners' questions, misunderstandings, or indifference (Yanase, 2022). Therefore, the author believes that recognizing educational practice as a scientifically reproducible operation undermines both practice and science (Kashiba and Yanase, 2020; Yanase, 2021). Educational practices are too complex and should not be deemed to be strictly reproducible.
- 11 Two weeks of instruction were necessary for intonation because many students viewed intonation merely as a change in pitch, disregarding changes in nuances. This issue will be discussed later when explaining the use of standup comedies as a teaching tool. Another reason for the extended instruction was that the textbook contained a wealth of qualified example sentences.
- 12 The author usually acknowledges his mistakes and apologizes to students immediately. However, he was exceptionally embarrassed when, in the week following the challenging instruction on linking, the lesson covered assimilation, such as "Did you," which even junior high school students would understand without difficulty. He could not honestly apologize to the students in this case. That failure to estimate the difficulty level for students was too critical to acknowledge. The author continued with the class, justifying himself that unrestrained admission of mistakes by the teacher could result in

the loss of trust from the students. However, the prior assessment of learners' cognitive challenges is undoubtedly the most essential task in lesson preparation. The author in this episode clearly failed in this crucial duty.

- 13 Students speak in pairs or in groups of three or four. However, for the sake of brevity, this report only uses the expression “pair.”
- 14 Age-related limitations on language acquisition are well known. The acquisition of native-like foreign language pronunciation becomes extremely challenging after the so-called “critical periods.”
- 15 Toward the end of the semester, the author required students to prepare a 1-2-minute speech and present it to the class to demonstrate their integration of bottom-up and top-down skills. Nonetheless, as discussed in section 3.4, the author plans to discontinue this activity in the future and focus more thoroughly on note-taking skills.
- 16 In Nishikawa's (2016) *Mutual Learning*, the teacher rarely interrupts the learners' activities collectively in this way. Although the author's practice was influenced by Nishikawa, it does not exactly replicate his teaching methods.
- 17 Ondoku (<https://ondoku3.com/en/>)
- 18 The author subscribed to the premium version primarily because the fee was relatively inexpensive at less than 1,000 yen per month. Equally important, however, was that he wanted to use the application immediately; the use of the university budget would take several days for approval. In the future, however, if English instructors want to use such AI, the university should probably establish an organizational contract.
- 19 Although the *Comprehensive Learning Encyclopedia of English Pronunciation* claims to present American and British English, the latter only appears in some parts of the appendices. The book is practically an American English pronunciation guide.
- 20 The use of ChatGPT in English education in general is reported in Yanase (2023b). The utilization in teaching academic English writing was reported at the Kyoto University Education Symposium (“Current Status and Issues with Generative AI in University Education”) held online on September 8, 2023, under the title “Large Language Model AI Prompts Redefinition of English Education: Organizations that Evolve and Those that Falter.”
- 21 Language Reactor is a Chrome browser extension that enables users to view English and Japanese subtitles on YouTube and Netflix, rewind to the previous part, playback a subtitle line with the sound, and output English scripts and Japanese translations. For more information about Language Reactor, please refer to the i-ARRC DELE webpage (https://www.i-arrc.kyoto-u.ac.jp/english/consultation_jp_FAQ#frame-603).
- 22 Hayaemon is an MP3 player that can rewind a sound source on the hard disk for a few seconds like a cassette tape recorder. It can also control its playback speed. It is a convenient free application for teachers who manipulate sound sources in their classrooms. The DELE website also has an article about Hayaemon (https://www.i-arrc.kyoto-u.ac.jp/english/consultation_jp_FAQ#frame-640).
- 23 <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2023/world-ranking>
- 24 The weekly portfolio format required students to write in English about their weekly English study time (including class time), a general review of their independent English study, the English videos they watched, and specific points they learned. The author asked students to summarize their own interests in these descriptions since he valued the continuation of students' English study (i.e., forming the habit of self-study). The purpose of *Active Listening* is “to improve students' listening skills so that they can participate in lectures in English on their own initiative.” Most Japanese students participate in a lecture in English when they have a strong interest in the subject. Therefore, the author prioritized the development of learners' interests. The author indicated the importance of developing the habit

of self-study in the percentage of the grade: the portfolio will constitute 50% of the total grade, incorporating 20% for the speech presentation after it is discontinued in the following semester. In writing portfolios, students were permitted to use AI, such as DeepL, QuillBot, and ChatGPT, to make their writing experience more instrumental to learning. Simultaneously, they were asked to report the type and degree of their AI use at the end of the portfolio. Several enthusiastic students wrote at least three pages each week. From all portfolio entries, the instructor selected and shared some portions on the screen with his comments at the beginning of the following class. The author watched at least the first few minutes of the English videos of students' choice and commented on them as well, appreciating the students' selections. This cycle of submission and feedback seemed to foster a culture of a learning community.

- 25 These figures are the result of an anonymous class survey conducted by ILAS. Incidentally, 11 respondents chose "4" (agree) and three respondents chose "3" (somewhat agree) out of the four options, with zero negative responses ("2" and "1").
- 26 The term "language game," as presented by the philosopher Wittgenstein (2009), refers to various human activities in which a particular language use is involved. This concept relativizes the view of some linguists who analyze language as a sign system independent of human life. The "language game" concept encourages us to consider language as it is used within specific social and historical constraints.
- 27 Here, "collaborative learning" and "cooperative learning" are contrasted, and the latter is understood as "learning in the style of division of labor." In such cooperative learning, the scope of the tasks for individual students is predetermined by the teacher.
- 28 One of the future tasks for *Active Listening* is to differentiate this course into "I" and "II" to meet the needs of students who wish to take two classes successively. Most E3 courses attract considerably fewer students than the admission limits. While a major reason for this is that E3 courses belong to the Career Development Course category, as mentioned above, another reason is that they do not meet the needs of the small number of dedicated students who take E3 courses. Since English lessons are more about forming habits of learning and using English than acquiring new knowledge, a small number of students take the E3 courses without requiring course credits. If *Active Listening* is reorganized as *Active Listening I* and *Active Listening II*, then the former can cover basic listening skills, while the latter can focus on applied and developed skills, both granting course credits to students. The former addresses the elemental needs of beginners (e.g., assimilation, reduction, and linking of individual phonemes), while the latter responds to the needs of more skilled English learners (e.g., intonation, note-taking, and vocabulary expansion). Admittedly, such a differentiation into "I" and "II" necessitates the creation of a common part of the syllabus.

References

- E3 Working Group. (2021). E3-kamoku-kento WG. [E3 course reform report]. Institute for Liberal Arts and Sciences.
- Kashiba, M., & Yanase, Y. (2020). Tojisha-kenkyu kara kangaeru konai-jugyou-kenkyu no arikata [In-school classroom research from the perspective of self-help research]. *The Bulletin of the Graduate School of Human and Social Sciences, Hiroshima University*, 1, 105–114. <https://doi.org/10.15027/50180>
- Kandabashi, J. (1990). *Seishin-ryoho-mensetsu no kotsu* [Tips for psychotherapy interviews]. Iwasaki Gakujutsu Shuppansha.
- Kandabashi, J. (1994). *Tsuiho: Seishinka-sindan-mensetu no kotsu* [Addendum: Tips for psychiatric diagnostic interviews]. Iwasaki Gakujutsu Shuppansha.
- Kuroki, T., & Kashima, E. (Eds.). (2013). *Kandabashi Joji igakubu-kogi* [Lectures of Kandahashi Joji at a

- school of medicine]. Sogensha.
- Nishikawa, J. (2016). *'Manabiai' no tebiki* [Guide to mutual learning]. Meiji Tosho.
- Hayashi, M., & Kashima, E. (Eds.). (2012). *Kandabashi Joji seishinka-kogi* [Kandahashi Joji's psychiatry lectures]. Sogensha.
- Fukazawa, T. (2015). *Eigo no hatsuon pafekuto gakusyu-jiten* [The comprehensive learning encyclopedia of English pronunciation]. ALC.
- Fukuzawa, Y. (2017). *Fukuo Jikiden* [The autobiography of Fukuo]. Aozora Bunko. https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/1864_61590.html
- Tateyama, Y. (2022). Moshi mawariga “Eigo nante jibun niwa muri” toiu hito bakarideshitara, jibundake eigoni chikarawo irerukotomo saketeita kamoshiremasen. [If I had been around people who thought learning English was too difficult, I might have stopped studying it.]. DELE at i-ARRC of ILAS, Kyoto University. Retrieved from https://www.i-arrc.kyoto-u.ac.jp/english/interviews/transcripts2022_jp#frame-718
- Yasudomi, K. (2022). Eigo ha tsuru deari, tsuru ijo no monodesu [English is a tool, which occasionally becomes more than a tool]. DELE at i-ARRC of ILAS, Kyoto University. https://www.i-arrc.kyoto-u.ac.jp/english/interviews/transcripts2022_jp#frame-708
- Yanase, Y. (2017). Eigo-kyoiku-jissen ni kyakkansei to saigensei wo motomerukoto nit tsuite [On seeking objectivity and reproducibility in research to assist English education practice]. *CASELE Journal*, 47, 83–93. https://doi.org/10.18983/casele.47.0_83
- Yanase, Y. (2018). Naze monogatariwa jissenkenkyu ni totte juyo nanoka [Why narratives matter for practice research: Generalizability by readers and users]. *Studies of Language and Cultural Education*, 16, 12–32. <https://doi.org/10.14960/gbkk.16.12>
- Yanase, Y. (2019). Manabino tameno taimen komunikeishon wa do aru bekika [How face-to-face communication for learning should be like: From the clinical knowledge of psychiatrist Joji Kandahashi]. *Labo Institute of Language Education Bulletin: Wings to your language*, 4. <https://www.labo-party.jp/research/vol04.php>
- Yanase, Y. (2020). Daigaku-hissyu-eigo-kamoku deno ‘manabiai’ no kokoromi: “Taiwa wo konkan toshita jigaku-jisyu’ wo mezasihite [Manabiai-style collaborative learning in a compulsory English course in university: Toward “autonomous learning driven by dialogues”]. *The Institute for Liberal Arts and Sciences Bulletin, Kyoto University*, 3, 23–45. <http://hdl.handle.net/2433/250942>
- Yanase, Y. (2021). Kyoiku-jissen wo kagakutekini saigenkanou na sousa to ninshiki surukotowa, jissen to kagaku no ryohou wo sokonau [Recognizing educational practice as a scientifically reproducible operation undermines both practice and science]. (Symposium: Reproducibility of Foreign Language Education Research 2021). *Philosophical Investigations in English Education* 3. https://yanase-yosuke.blogspot.com/2021/09/2021_11.html
- Yanase, Y. (2022). Gyakkyo wo ikasu shinseiryoku (sozoteki rejiriensu) ha jugyo de tsuchikaeru: Shintaihyogen karano guhatsuteki kominikeishon [The classroom can develop creative adaptation (creative resilience) that utilizes adversary conditions: Contingency in communication from bodily expressions]. In K. Murata (Ed.), *Rejiriensu kara kangaeru korekarano kominikeishon-kyoiku* [The concept of resilience redefines communication education] (pp. 185–204). Hituzi Shobo.
- Yanase, Y. (2023a). Jinkakuteki kominikeishon toshiteno jugyo [Teaching as personal communication]. In *Kyoto University Liberal Arts Education Practice Study Group, 4th Regular Meeting Records*, 4, 17–30.
- Yanase, Y. (2023b). AI no donyude eigo-jugyo wa yori ningenteki ni natta: Jissen-sokuho ni motozuku kotsatsu [“AI has made English teaching more human-oriented: A consideration based on preliminary reports of practice”]. Keynote speech at JACET Chubu Chapter Conference, *Philosophical Investigations*

- in English Education 3*, June 12, 2023. <https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/ai-jacet.html>
- Yanase, Y. (2023c). Eigoryoku wo koreijo shohinka/kaheika surutameni tsukattewa naranai: gijutsu shudo no toikara ningen shudo no toihe [AI should not be used to commodify and monetize “English proficiency”: From technology-oriented questions to human-oriented inquiries]. *Waseda Studies in Japanese Language Education*. 35, 57–72. https://waseda.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1704950219732
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press.
- Chi, Z., Zhang, S., & Shi, L. (2023). Analysis and prediction of MOOC learners’ dropout behavior. *Applied Sciences*, 13 (2), 1068. <https://doi.org/10.3390/app13021068>
- Schön, D. (1991). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. Basic Books.
- Wittgenstein, L. (2009) *Philosophical Investigations* (G. Anscombe, P. Hacker, & J. Schulte, Trans.; 4th ed.). Wiley-Blackwell. (Original work published 1953)

Appendix

Blog posts prepared by the author for *Active Listening* students

Comprehensive list

A list of YouTube videos for self-study of English pronunciation.

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/youtube.html>

For individual phonemes

A brief lecture on the vowels in American English

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_14.html

A brief lecture on the consonants in American English

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_15.html

Consonant clusters in American English

https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post_25.html

A list of American English pronunciation videos by VOA

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/voa.html>

The renowned site for learning American English pronunciation: Sounds American

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/sounds-american.html>

Assimilation, reduction, and linking

Learn American English pronunciation with Elemental English

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/youtubeelementalenglish.html>

Learn American English pronunciation through movies: Rachel's English

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/rachels-english.html>

Learn English with TV Series

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/11/learn-english-with-tv-series.html>

Intonation and sophisticated expressions

A list of videos on intonation from the “English with Kim” YouTube channel

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/english-with-kim-youtube.html>

Socially sophisticated English expressions (in Australian English): mmmEnglish

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/youtubemmmenglish.html>

Learn from Trevor Noah and other standup comedians for their inventive intelligence and deft storytelling

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/trevor-noah.html>

World Englishes

Varieties of English 1: English as a native language other than American English

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/1.html>

Varieties of English 2: English as a second language due to colonized history

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/2.html>

“Thinking in English” and “fluency”: videos produced mostly by YouTubers using English as a second language

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/11/think-in-english-fluency-youtube.html>

Accent's Way English with Hadar, an Israeli-born English pronunciation coach who settled in New York at age twenty.

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/20hadaraccents-way-english-with-hadar.html>

Academic English

YouTube channels of the top10 universities in the world

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/10youtube.html>

Cajun Koi Academy recommends note-taking

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/07/cajun-koi-academy.html>

Speaking

How to converse with ChatGPT in English (for advanced users)

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/chatgpt.html>

ChatGPT English conversation for beginners

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/chatgpt31chatgpt.html>

Two ChatGPT prompts for preparing for the Eiken Level 1 and other speech examinations

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/12chatgpt.html>

How to practice English presentations using AI

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/06/ai.html>

Learning Environment

Creating a digital Environment for English language learning

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/blog-post.html>

A collection of useful sites for learning pronunciation in the International Phonetic Alphabet (IPA)

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/04/international-phonetic-alphabet-ipa.html>

English pronunciation respelling

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/pronunciation-respelling-for-english.html>